
のび太のバイオハザード「オリジナル」

アリゲーター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

のび太のバイオハザード 「オリジナル」

【Nコード】

N1898W

【作者名】

アリゲーター

【あらすじ】

のび太達の町がバイオハザードにのび太達の運命やいかに

第一話 「なぜこんなこと」...

第一話「なぜこんなことに...」

2004.7.28...

今思えばなぜこんなことになってしまったのだろう

謎の男「こちらドラえもんさんのお宅ですか？」

ドラ「ハイそうですが...あなたは？」

するとそこに

のび「ドラえもんまたジャイアンとスネ夫にいじめられたよ」

ドラ「またかい？やれやれ」

謎の男「ちょうどいいですね」

のび「あれ？ドラえもん誰この人？」

謎の男「失礼しました、私アンブレラと言う大薬品企業の社員です」

ドラ「アンブレラってあの？」

社員「はいそれで私ある実験をするためここへきました」

のび「ある実験って？」

社員「はいこれです。ヤサシクナルです。これをばらまくと町の皆が優しくしてくれます」

のび「そりゃいいや」

社員「それではこれはあなた様お渡しします。どうぞ自由にでは私はこれで」

ドラ「行っちゃた、それでどうするの？」

のび「もちろんまくさこれ押せばいいんだね、それっ」

プシュー

ドラ「なんか怪しいけど…まあいいか」

社員「くつくつく本当にばらまいたな2日後にどうなるかも知らないでさて任務も終わったし社に戻るか」

2日後の夜…7月28日…

のび「結局みんな優しくしてくれなかったな…」

ドラ「実験が失敗したんじゃない？それじゃあ僕はもう寝るね」

のび「うんその前に僕トイレに行つて来る」

ドラ「先に寝てるよ」

そしてのび太が2階から降りてくると…

次回へ

第二話 「町の異変」

第二話 「町の異変」

のび太がトイレで2階から降りてくると……

ぐちゅぐちゅ

あゝ

のび「？何の音だ？」

トイレを終えて音の方向に向かった

のび「何だママがこんな所で何してるの？」

ああゝ

のび「？ママどうした…！？」

ママの後ろにパパの首があった…

のび「パ…パパ！？ママっパパをどうしたの！？」

ママ「ああゝ」

のび「う…うわあゝ」

驚いたのび太は慌てて2階へ行った

のび「ドラえもんっママがママが」

ドラ「うゝんどうしたののび太君？」

のび「ママが…ママがパパを食べちゃったんだ！」

ドラ「えっ！？どういうこと」

のび「わからないけど来て」

そうすると2階にママがやって来た

ママ「ああ」

ドラ「！？ママどうしたのいったい」

のび「目を覚ましてよママっ」

ドラ「危ないのび太君」

のび「ドラえもんっ」

ドラ「のび太君ママは僕がなんとかするから逃げて」

のび「う…うんわかったよ」

そうして外へ逃げるのび太果たしてどうなるか

次回へ

第三話 「仲間達との合流と話し合い」

第三話 「仲間達との合流と話し合い」

前回、ママに襲われて逃げるのび太

のび「今は逃げなきゃ…ん？」

廊下で包丁を手に入れた。外に出ると…

のび「何だこれはいつたい何が起こってるんだ」

周りはママのような人達や死体がたくさん

のび「う、うわぁー早く逃げなきゃ」

すると のび太の横に警察官の死体があった

のび「何か武器はないかホルスターにあるのは……あつ、あつた銃だ！」

のび太はハンドガンと弾を手に入れた

そうしてゾンビ共を倒しつつ学校へ到着した。

のび「学校か…ここなら広くて頑丈だし生存者がいるかも」

昇降口へ向かうと2匹の犬が死体を喰っていた。

のび「!!!？」

2匹の犬が襲いかかって来た。のび太はなんとかよけて死体のところにある昇降口の鍵を取り出して使い中に入った

のび「はあはあ…危なかったここからだと保健室が近いな」

ガラッ

ジャ「の、のび太じゃねえかよ！」

のび「ジャイアン、それに皆も」

静香「のび太さん無事だったのね」

スネ夫「ノロマのお前がよく無事だったな」

出来杉「のび太君無事でなによりだよ」

のび「……この人達は？」

ジャ「とりあえずこの学校に逃げて来た人達だ」

のび「そう…僕は野比のび太」

聖奈「私は中学2年生の緑川聖奈」

健治「同じく佐藤健治だ」

白峰「…白峰だ中学3年」

咲夜「私は桜井咲夜」

太郎「僕は小学1年生の太郎」

のび太はひととおり挨拶が終わりスネ夫がある提案を言う

スネ夫「町中ゾンビだらけだしひとまず裏山に身を隠すのはどう？」

のび「裏山か…」

スネ夫「町の中はゾンビだらけだけど裏山の中だったら殆ど人も動物もない筈だよ！」

出来杉「なるほどそれで救助が来るまで隠れるということだね」

白峰「ちよつと待て箆もるのはいいが食料とかどうすんだよあの山に山菜とかある保証はないんだぞ」

スネ夫「コンビニを使えばいいんじゃない？どうせ店員さんなんていないんだし」

ジャ「バカ、結局ゾンビ共がいる町に行くんじゃないか！」

スネ夫「あ……」

静香「…でも他にいい案はないわ保健室に立てこもっているよりはずっといいと思うわ」

出来杉「…気のせいかゾンビが集まっている気がする」

咲夜「早めに動いた方がよさそうね…」

出来杉「動くなら迅速に行こう」

静香「ええ」

のび「僕はいいと思う」

白峰「まあそれしか無さそうだな」

ジャ「なら俺とスネ夫は今の内付近の店から食料と武器になる物を集めて来る」

スネ夫「わかったよジャイアン」

出来杉「それじゃあ僕達は学校内で何か使えそうなものを探してこよう」

静香「ええ…でも何かあった時にこのままだと危険じゃない？」

白峰「なら携帯がいいんじゃないか？」

出来杉「それだ！皆で携帯電話を使おう！」

ジャ「よしっ早速取りに行こうぜ！」

のび「あ…その前に僕トイレに行つて来ていいかな？」

スネ夫「おいおい…まあのび太らしいや早く行つて来いよ」

ジャ「なら俺達は先に行つてるぜ、ゾンビ共に気をつけろよ」

のび「ええー！？僕1人で！？」

ジャ「のび太のクセに情けない事言ってるじゃねえ！！早く行つて来い！！」

のび「ちえ〜…」

〜トイレ〜

のび「は〜家でしたのに結構でたな…ん？」

ああ〜

のび「くそっ来やがった」

のび太がトイレしている間にゾンビ3体入って来た果たしてのび太はどうなる

次回へ

第四話 「探索」

第四話 「探索」

のび太がトイレをしている間に3体のゾンビが入ってきた

ああゝ

のび「くらえっ！」

バンッバンッ

パンツ（頭が吹っ飛ぶ音）

2体のゾンビの頭を銃で撃ち

のび「それっ」

そのまま包丁を残りのゾンビめがけて投げる

グサッ おおゝゝ バタ

のび「早く戻ろう」

そしてトイレを後にする…

のび「あっそうだついでに職員室へ携帯をとりに行く」

ゝ職員室ゝ

のび「え〜と、あつ、あったこれだ！ついでに予備としてもう一つ持っていこ」

すると左右の窓が割れたそして中からゾンビが入ってくる

のび「うわっまたか、バンッバンッ」

のび太は右のゾンビを倒して急いで保健室へ戻る

ガラッ

のび「あつ白峰さん」

白峰「おう野田か他のやつらはもう探索に行ったぞ俺ももうすぐ行くつもりだ」

のび「そうですかわかりました……てっ僕の名前は野田じゃなくて野比です」

白峰「ああそうか悪いなじゃあ俺も探索に行ってくる気をつけろよ」

のび「はい、白峰さんも気をつけて」

白峰「ああ」 ガラッ

のび「さて僕も行くか」

そして皆は探索と物資調達に行った

探索チーム

聖奈・静香チーム

咲夜・太郎チーム

他4人は一人で探索

物資調達チーム

ジャイアン・スネ夫チーム

のび「まずは近くの教室から順に調べてみよう」

のび「特に変な所はないな」

ハンドガンの弾とグリーンハーブを手に入れた

のび「次は隣の教室に……」

その教室は死体が2、3体食いあらされていた

のび「ひどいな……ん？これは……」

果たしてのびたが見たものとは…

次回へ

第五話 「探索その2」

第五話 「探索その2」

のび「なんだただのガラスの破片か…」

バリイン！！

のび「！！？」

ガウガウッ！

のび「ちいっコレでも食らえ」

バンッバンッ

ギャイン

のび「今の内に」

ガラッ バタン

のび「ふうーさて次の教室へ行くか」

ガラッ

のび「う…ここも酷いな」

そこは教室中血の匂いが充満し頭をかじりとられたり上半身や

下半身がなくなっている死体 が教室中に散らばっていた
のび「う、うえええ…早く出よう ん？」

のび太は死体の手にあった鍵を見つけた

のび「よしっ次は…ん？あっちは体育館があるな」

廊下を歩いていると洗面台に死体があった

のび「弾を持っているな…貰っておこうさて行くか」

次回へ

第六話 「探索その3」

第六話 「探索その3」

のび「ここは美術室か あっあそこにメモ書きがある」

ゾンビを普通に倒しながら取りに行くのび太…もうゾンビは慣れてしまったようだ

のび「これは…パスコードA？」

バリイーンッ ガウッガウッ

のび「！またか」

ゾンビ犬再び登場

ダッダッダッ ガラッ バタン

のび太は美術室をなんとか脱出

のび「次は正面の教室だな…」

また死体が散乱している教室だったその中に…

のび「！？あの服は スネ夫？ いや違うな服は似てるけどスネ夫はもっと背が小さい」

そのころ調達チームは…

スネ夫「ハックション」

ジャ「何だスネ夫風邪か？」

スネ夫「うゝん誰か僕の悪口を言ってるのかな？」

のび「さてと次の教室は うわ…またか」

ゾンビが人の死体を食っていた

次の教室 ガラッ

のび「!!!？」

バタン

のび「何も見てない」 ダッダッダッ

のび太が見たのは教室中にいたゾンビの大群だった

のび「次は体育館か」

ギャオオオオー

バリイーン

のび「!!!？ 何だ体育館からか？」

のび「この扉は頑丈で入れないな」

体育館は入れないためいったんあきらめるのび太

のび「さっきの声気になるな…」

〈保健室近くの教室〉

のび「校長先生！手になにか持っている… 5039？金庫のパスワードかな行ってみよう

〈校長室〉

のび「よしっ開いた！成績表？こんなの役に立たないよ」

のび太は成績表を投げ捨てた

〈家庭科室〉

のび「薄暗いな…何処かに明かりをつけるスイッチがあるはずだ」

搜索中

のび「あつたこれかな」 パチッ

のび「……あれ壊れてるのかな？もうひとつのスイッチを探さない
と」

搜索中

のび「あつたあつたこれだなきつと」 パチッ

のび「よしっついたなさてと探すか」

のび太はロッカーの中にあつたバッテリーの小さいほうを手に入れた

のび「何のバッテリーだろ？」

次回へ

第七話 「探索その4」

第七話 「探索その4」

家庭科室を後にして 隣の部屋も調べる事に

のび「ここは資料室だな鍵がかかってる。でも簡単な鍵だから……」

バンバン バキイ

のび「よしっ開いた」

中を探索中

のび「収穫は……」

ハンドガンの弾

ショットガンの弾

警備員の心得

のび「この心得一応読んでおこう」

他の皆

咲夜「太郎君平気？」

太郎「うん大丈夫だよ」

咲夜「そう、ならいくわよ」

太郎「うん」

こっちは大丈夫そうだ

白峰「くそっコレでも食らえ」

バンバン

おおおう

白峰「ちいつここは後にするか」

こっちは大変そうである

のび太は心得を読み終わる

のび「？E - 11？なんのことだ？」

ひとまず探索を再開するのび太

のび「次はこの部屋だな。ここは机等を置いておく倉庫だったわけ
ガチャ

のび「うわぁ……ここも酷いな……ん？これって鍵束だなシールが汚
れているけどうつすら『体』って書いてあるきつと体育館の鍵だな」

あああ うああ

おおおう

のび太「!!!? まずい逃げよう」

なんとかゾンビ共振り切ったのび太

のび「こっちは調理室だな何か食糧はないかな」

すると前方の死体が

のび「給食のおばさんここも襲われたのか」

冷蔵庫の中は食い散らかされていた

のび「ここはダストシュートかどこかに繋がっているようだけど小さくて入れないな」

近くにあった小部屋

のび「ここも簡単に壊せそうだな」

バキィ

中に入ると…のび「はるお! はるおじゃないか!」

はるお「の…のび太じゃないか助かったゾンビ共に襲われてここまで逃げて来たんだ」

のび「そうだったのかとりあえず保健室に行こう」

ゝ保健室ゝ

はるお「すまないのび太助かったよ」

のび「いいんだよ僕はまた探索に行くけど1人で大丈夫か？」

はるお「ああ一応武器もあるから」

のび「そうかあっそうだ！予備にと思って持っておいた携帯渡しておくよアドレスは入っているから」

はるお「わかったありがとうのび太気をつけるよ」

のび「ああ」

ガラッ バタン

のび「さっき見つけた体育館の鍵を使おうさっきのあの声も気になるし」

く体育館く

のび「特に変な所はないなあるのは死体だけだ…」

グサッ

のび「うわぁ！？」

目の前で長い何かが刺さった

果たしてそれは…

次回へ

第八話 「VS バイオゲラス」

第八話 「VS バイオゲラス」

のび太が体育館に入ると目の前に長い何か刺さった

ギャオオオオオオオオオオ!

のび「冗談だろなんてでかさだ」

スウウウ~~~~

のび「!? 消えた!? そんな馬鹿な!!」

グサツ!

のび「うわっ! こんなやつ相手なんかできない逃げよう」

キラッ

のび「ん? あそこで何か光ってる隙を見て取ろう」

バンッバンッ

グオオオオオオオオ

カメレオンに弾を撃ち込みながら光ったところに近づくのび太

のび「よしっとったぞ早く逃げよう」

ダッダッダッ

体育館から脱出し化け物が入ってこないよう扉を閉めるのび太

のび「はあはあ…危なかった」

ドカアアアアン

グギヤアアアアオオオオオ

のび「！？爆発音とさっきの化け物の声！？」

とその時

「ウワアアアア」

のび「出来杉君！？西校舎のほうだ！

ゝ家庭科室ゝ

のび「出来杉君！このっ」

バンッバンッ

おおおう

出来杉「すまないのび太君助かったよ」

のび「危ないところだったよ。何か武器を持ってないと危険だよ」

出来杉「そうだね僕も何か身を守る物を探したほうがいい。そういえばのび太君。君は携帯電話を見つけたかい？」

のび「あつうんでも誰からもかかってこなかったから不安だったよ」

出来杉「…僕たちは君がどの携帯を持っていたのかわからないから君から一度かけてくれないと連絡の取りようがないよ」

のび「あ…」

出来杉「ともかく一度保健室へ戻ろうたけし君たちが渡すものがあるからって」

のび「うんわかった」

次回は一時集合

次回へ

第九話 「一時集合」

第九話 「一時集合」

〈保健室〉

ジャ「はるおっ！！無事でよかったぜ」

静香「はるおさん無事でなによりだわ」

はるお「いやあのび太に助けてもらえなかったら今頃どうなっていたか」

ジャ「そうだのび太お前携帯見つけたら一度連絡よこせよ」

スネ夫「何時まで経っても連絡が無いから死んだかと思ったぞ」

白峰「（そういえば電話されてなかったから無事かどうか確認できなかったな……）」

静香「心配したのよのび太さん」

のび「ごめんでも僕も出来杉君に言われて『しまった』っと思ったけど考えてみたら僕も皆の電話番号やメールアドレスがわからないからどうせ意味なかったんじゃないの？」

のび太以外「あっ……………」

健治「とつとりあえず皆の探索の結果を見ようぜ」

咲夜「そっそうね」

のび「僕は一階の部屋を全部見回って調べておいたよ後調理室の近くの部屋ではるおを見つけたよ」

ジャ「俺とスネ夫は近くのコンビニから色々と食べそうな物を持ってきた」

出来杉「食べ物他に違うものがあるけど…」

スネ夫「近くにあった銃を扱っている店から取ってきたんだこんな状況だから役に立つと思うよ」

ジャ「まだかなりの弾が残っているから何回かに分けて取りに行くつもりだとりあえずそこにあるショットガンはのび太、静香ちゃん、出来杉、はるおが持っていてくれそしてこのハンドガンは太郎非常時にお前が持ってくれ」

静香「私こんなもの扱えないわ」

太郎「僕も」

スネ夫「気持ちちはわかるよ静香ちゃん、太郎でも今は自分の身は自分で守るしかないんだ」

ジャ「俺たちも何かあつたら真っ先に駆けつけるけど一応持っておいてくれ」

咲夜「太郎君には私が教えるわ私も初心者だけど少しくらいなら使

えるわ」

太郎「うんわかった…」

静香「仕方ないわよねこんな状況だから」

ジャ「のび太お前は射撃が得意だから弾を多めに持っておいてくれ」

のび「いいの？」

ジャ「そのかわり皆に何かあつたらすぐに助けに行けよ」

のび「わかった」

健治「そうだけし今度は銃の他に接近戦で戦えるナイフとか持ってきてくれ」

白峰「俺にも」

ジャ「あつそうだあるぞ出すのを忘れてたこれでいいか？」

健治「サバイバルナイフかファイティングナイフか」

白峰「俺はこのファイティングナイフにするがいいか？」

健治「ああじゃあ俺はこのサバイバルナイフか」

スネ夫「ところで聖奈さんと静香ちゃんは姿を見なかったけど何をしてたの？」

静香「園芸部の教室で薬草を探していたわこんな状況だから怪我の手当てに使えるものが必要だと思って…」

聖奈「あと隣の教室で救急箱があったから持ってきたわ量からしてあと5回くらい使えると思うわ」

はるお「俺は少し動けるようになってから探索してハーブや弾を持ってきた」

白峰「俺もはるおと同じくらいだ」

健治「俺はショットガンの弾やハンドガンの弾を結構持ってきた警察官の死体がたくさんあったからな」

ジャ「流石だなで、咲夜さんと太郎は？」

咲夜「ごめんなさい太郎君を守るので必死だったわ」

太郎「ごめんなさい咲夜おねえちゃんに皆」

咲夜「いいのよこんな状況なのに謝るなんて偉いわね」

ジャ「そうか仕方ないよな…で出来杉は？」

出来杉「ごめん僕も逃げるので精一杯だったよさっきものび太君に助けられたばかりだよ」

ジャ「へえ、やるじゃねえかよのび太」

静香「凄いわのび太さん」

のび「そんなこと無いよ」

スネ夫「まあ武器も無いのに無事だった出来杉も凄いいんじゃないか？」

ジャ「かもな今度からは自分の身は自分で何とかしろよ」

出来杉「わかってる気をつけるよ」

のび「そうだ！皆に伝えないといけないことがあるんだ」

スネ夫「なんだ？またトイレか？」

のび「違うよこの学校にとんでもない怪物がいるんだ」

全員「怪物！？」

のび「僕は見たんだ体育館で姿を消すことが出来るカメレオンのような大きな怪物を！」

ジャ「本当か！？」

出来杉「そういえばさっきも犬や猫とは思えないような動物の声が聞こえたよのび太君が言った怪物に違いないね」

ジャ「そうだとするとこの学校ももう安全とはいえないな急がないと」

白峰「となると裏口から山へ抜ける道を何とかしないとまずいな」

静香「さつき裏口を見に行っただけど裏山への扉には鍵がかかってたわ。でも鍵穴が見当たらなかったのどういふことなのかしら」

スネ夫「遠隔操作して開閉しているのかな？その辺の細かいところは学校内の探索する方に任せるよ」

出来杉「わかった僕たちは裏山への移動手段を探しておくよ」

ジャ「何かあつたら連絡することを忘れるな…特にのび太」

のび「わかってるよ」

ジャ「それじゃあ皆お互い気をつけようぜ！健闘を祈る」

スネ夫「ああ」

はるお「おう」

静香「ええ」

太郎「うん」

咲夜「ええ」

健治「おう」

白峰「ああ」

出来杉「うん」

のび「うんがんばろう生き残るために」

全員「おーー」

次回は2階の探索

次回へ

第十話 「2階の探索」

第十話 「2階の探索」

「守衛室」

のび「さっき見つけたこの防火シャッターキーで…」

ピーッ

のび「よしっこれで上に行ける」

プルルル！プルルル！ ピッ

のび「はいもしもし？」

出来杉「のび太君？2階への防火シャッターが全て開いたみたいだよ！でも3階への防火シャッターがまだ開いてないみたいそっちで何かしたのかい？」

のび「守衛さんのパソコンを使って解除したけど手持ちの防火シャッターキーじゃ3階への解除は無理みたい」

出来杉「そうかいじゃあ僕は先に2階を探索しているよ」

のび「わかった僕もすぐに行くよ」

ピッ ガタンッ

のび「!？」

キシヤアアア

のび「虫!？」

バリイイイン

のび「…逃げたのか？」

ああー

のび「うおっ」

パンッ

ゾンビの眉間を撃つのび太

のび「早く二階へ行こう」

く2階く

のび「さっき逃げたやつと同じのがいるな…」

キシヤアアア ベチャ シュウウく

のび「うお!こいつ毒を吐くのか!?気をつけないと」

移動中

ゝ音楽室ゝ

のび「ここは使えそうなものは無いな」

バリイイイン

ギアアギアア

のび「カラス！？ゾンビ化したやつか」

バンッバンッ

のび「キリが無いな一旦逃げよう」

ガラッ

音楽室を後にするのび太

ゝ西側ゝ

のび「ここは倉庫だな」

ガラガラッ

のび「逃げ込んだ人達が死んでるな…ん？紙切れ？…パスコードB
か」

プルルプルル

のび「はいもしもし？」

出来杉「もしもしのび太君？出来杉だけど何か手がかりは見つかったかい？」

のび「何かの暗号のような数字が書かれた紙切れを見つけたよ防火シャッターのキーはまだ見つからないけど…」

出来杉「そうか…僕も探してみるよじゃあまた何かあったら連絡するよ」

のび「うんわかった」

ピッ

のび「さてここから出るか」

ガチャ

のび「あれ？何処か引つかかったのかな？」

ああああ　　うあああ

のび「!？」

バンバン

おうおうう

バンバン

のび「はあはあ」

白峰「おい誰か中にいるのか!？」

のび「白峰さん! ドアが開かないんです周りはゾンビだらけで助けてください」

白峰「よし待ってるこいつで…」

ガッシャアアン

白峰「こっちだ野田!！」

のび「野比です!」

く廊下く

白峰「この学校ボロいのかたまにこついうことがあるようだな」

のび「そうみたいですなありがとうございます」

白峰「ああいいんだよ。それよりこれを見つけたんだが何かわかるか?」

のび「これって3階への防火シャッターキーですよ」

白峰「そうかなら早速開けてくるぜ」

のび「あっ待ってください助けてもらったお礼です僕が行きます」

白峰「そうかなら任せたぞ」

のび「はい」

3階の防火シャッターキーを手に入れたのび太

次回へ

第十一話 「3階の探索」

第十一話 「3階の探索」

「守衛室」

ピーッ

のび「よしっこれで3階へいけるなでもその上の4階は開かないな……」

ブルルル ピッ

のび「はいもしもしのび太です」

静香「もしもしのび太さん？私よ」

のび「静香ちゃんどうしたの？」

静香「警備員のおじさんの遺体から重要そうな書類を見つけたわ。多分裏山の扉へのことについて書いてあるわ」

のび「本当！？で、内容は？」

静香「えーと…裏山への扉は山中で不審者を見かけようになつて一般的な鍵は止めて電子ロックに変更することにしたみたいなの。それで解除の方法は…」

バリイン ああああ

聖奈「入ってきたわ逃げて静香ちゃん！」

静香「ごめんなさいまた後で連絡します」

聖奈「急いで！」

のび「もしもし！静香ちゃん？もしもし？…」 ツー ツー

のび「あつちも大変そうだな僕もがんばらないと」

↓3階 パソコン室↓

のび「この人は…名札に『保険医 花田』って書いてある保険医さんか…なにかはいつて…ん？ポケットに何かある」

小さな鍵を見つけた

のび「何の鍵だろう？まあ次に行くか…」

↓職員休憩室↓

のび「ここは休憩室か…！？何だこの緑のゴリラのような化け物は警察官の死体がたくさんある…こいつがやったのか？マシンガンまで真つ二つになってる何なんだこいつはいい…」

休憩室を後にするのび太さっきの化け物の死体を気にしながら次進む

のび「この教室も特に無いな…」

バリィン がうっがうっ

のび「くそっこれでも食らえ」 バンバンバン

ギャウッ

のび「ふう…今頃ドラえもんどうしてるのかな大丈夫なのかな…心配だな」

次回とうとうどらえもんと安雄登場

次回へ

第十二話 「逃げ!!」

第十二話 「逃げ!!」

↳理科準備室↳

のび「ここは理科準備室のようだな」

ガラッ

のび「ど……ドラえもん!!」

ドラ「のび太君無事だったんだねよかった!」

のび「それにお前は安雄!どうしたんだこの傷は」

安雄「のび太あ、この学校マジでやばい早く逃げるんだとんでもない怪物がいる…」

ドラ「喋っちゃ駄目だ安雄君!じっとしてるんだ何か巨大な生物に噛まれたみたいなんだ。オマケに衰弱の具合から毒が回ってるみたいなんだおそろく猛毒だと思う…」

安雄「あいつはヤバイカメレオンみたいに体の色を変えて襲ってくるんだ」

のび「カメレオン!?体育館にいたやつか、アイツ学校に入り込んできたのか…」

ドラ「このままじゃ危ない血清を打つ必要があるんだ。でも安雄君一人にするわけにいかないんだ」

のび「僕が行くよだからドラえもんはここで安雄を守っておいてくれ」

ドラ「わかったでも一刻を争うんだなるべく早くに」

のび「うんわかった」

ガラッ バタンッ

ドラ「頼んだよのび太君」

ダッダッダッ

のび「あれ？ちょっと待てよ病気になったらワクチンを打つ、毒蛇に噛まれたら血清を打つ、でもそれわまったく同じじゃない、じゃあカメレオンの血清ってあるのか？」

プルル ピッ

出来杉「出来杉です。のび太君かい？」

のび「うんひとつ聞いていいかい？この学校にカメレオンに対する血清ってあったっけ？」

出来杉「カメレオン？南米とかにいる一部の奴は毒を持ってた気がするけど少なくともこの学校に無いと思うよ」

のび「そうか…ありがとう」

ピッ

のび「とりあえずあるだけ持っていこう」

く保健室く

のび「あつたこの棚の中だな」

ガチャガチャ

のび「！？鍵がかかっているこんな時にどうしよう鍵を探している時間なんか…あつ」

少し時をさかのぼり

のび太は保険医の花田さんのポケットから小さな鍵を見つけた

のび「もしかしてこの小さな鍵…」

ガチャッ

のび「やった開いたとりあえず全部だ」

く理科準備室く

のび「安雄血清だぞ」

安雄「す…すまないのび太」

ドラ「安雄君血清を打つからもう大丈夫だよ」

安雄「のび太…僕お前のこと見直したよいつもはドジだけどこういう時には頼りになるな…」

のび「ハハッ僕は本番に強いタイプなのかな？」

安雄「ハ…ハッおかげでたす…」

のび「安雄！？どうしたんだ！」

ドラ「大丈夫気を失っただけだよ」

のび「よかった…でも血清適当に持ってきて大丈夫だったのかな？」

ドラ「う…ん様子から見ると大丈夫そうだよ逆に1つだけだったら駄目だったかもしれないかも」

のび「そうか…でも助かってよかったよ」

ドラ「近くに相談室があったねそこで休ませよう」

のび「いや保健室へ運ぼう今から皆も呼ぶね」

ドラ「？うんわかった」

そして二人で安雄を運び保健室へ向かうのび太とドラえもん

次回へ

第十三話 「新たな生存者」

第十三話 「新たな生存者」

前回のび太の活躍により安雄が助かり新たな生存者二人が増えた

く保健室く

出来杉「ドラえもん！無事だったんだね」

ドラ「出来杉君こそ無事で何よりだよ」

健治「こいつ大丈夫なんだよな？化け物の仲間じゃないんだよな？」

のび「そうですよ。それにドラえもんは僕の親友なんです」

健治「まあお前らを信じるよ」

のび「そつえばジャイアンはゾンビ共があちこちにいるから時間がかかるって」

出来杉「静香ちゃんと聖奈さんも連絡が取れないんだ」

健治「咲夜さん達もだ…」

ドラ「皆大変なことになっているね…何か僕に出来ることはないかい？」

のび「出来ればすぐにでも四次元ポケットで…あれ？ポケットは？」

ドラ「……ごめんママともみあいになった時……」

のび「そうだママはどうしたの!？」

ドラ「……………」

のび「…そう…ママどうして」

出来杉「のび太君……」

健治「のび太……」

プルルル

聖奈「もしもし聖奈です。のび太君聞こえる？」

のび「聖奈さん!無事だったんだね!」

聖奈「私は平気なんですが…静香ちゃんが足を挫いてしまって」

のび「そうですか…聖奈さん今どこにいるんですか？」

聖奈「はいえ〜と…器具庫の中にいます」

のび「わかりましたじゃあ全員そろったら助けに行くのでそこで隠れていてください」

聖奈「わかりました足手まといになってすみません」

ピッ

出来杉「それじゃあ僕たちも裏口の扉の問題を解決しよう」

のび「裏口の扉…あっ」

プルルル　ピッ

聖奈「はい」

のび「聖奈さん静香ちゃんの荷物の中に裏口の扉に関する書類があると思うんだ」

聖奈「あっはいえっと…」

静香「聖奈さんこれよ」

聖奈「あっありがとう。え〜とまず要点からいいますと裏口の鍵は最近になって一般的な鍵はやめて電子ロックに変えたらしいです。操作は1階の警備員詰め所で出来るようです。パスワードは5桁になっいて週ごとに定期的に変えているそうです。ただこの警備員さんは忘れっぽくメモを書いているそうですがそのメモを落としてしまったらしいんです。」

のび「わかりましたありがとうございます必ず助けに行きますね」

ピッ

健治「次にやることが決まったようだな」

ドラ「パスコードを探してロックを解除するんだね」

出来杉「そういえばさっき理科室の鍵をみつけたんだ何か無いかみてくる…」

ガラッ

白峰「おい今理科室から変な声が…!!」

チャキッ

白峰「化け物！」

ドラ「!!!？」

のび「わー！待ってください！これは化け物じゃありません！」

白峰「冗談言うな！こいつのどこが化け物じゃないって言うんだ！」

出来杉「落ち着いてください！彼（？）はドラえもんって言って未来から来た…（いきなりこんなこと言っても信じてもらう方が難しいよ）」

健治「落ち着いてください白峰さん一見化け物のように見えるけどあそこで寝ている英雄って奴を助けてくれたんだ」

白峰「3人が違っつて言うなら信じるがもし妙なまねしたら遠慮なくたたき殺すからな…」

ガラッ

咲夜「ごめんなさい連絡しなくて……え〜とこの青い方は？」

太郎「だ〜れ？」

出来杉「え〜と」

数分説明

咲夜「まあ敵ではないのね味方なら大歓迎よ」

太郎「よろしくね！ドラえもん」

ドラ「こちらこそよろしく」

白峰「そうだ！理科室から化け物としか言いよの無い声が聞こえたんだ一応中を見たいんだか誰か鍵を持っている奴はいないか？」

出来杉「鍵なら僕が持っています。これから調べに行くところだったんです」

白峰「そうかなら理科室は頼んだぞ」

出来杉「はい」

白峰「なら俺はまた探索にいくぜ」

健治「俺も」

咲夜「私たちはここで休むわ」

のび「じゃあ僕もそろそろ行きますね」

ガラッ バタンッ

く数分後く

プルル

のび「はい出来杉君？」

ダンッダンッ

出来杉「の…び…太君…理科室…何…いる…」

のび「出来杉君！？どうしたの！？」

ダンッダンッ

ギャオオオオオ

出来杉「ウワアアア！」

のび「出来杉君！？どうしたんだ！？出来杉君！！」

ブッッ

のび「大変だ急がないと！」

果たして出来杉はどくなったのか!?

次回へ

第十四話 「VSバイオゲラspart2」

第十四話 「VSバイオゲラspart2」

「理科準備室」

ガチャッ

のび「で…出来杉君！」

出来杉「ああ…くっ…のび太君か…」

のび「大丈夫なのかい出来杉君」

出来杉「なんとか…でも…理科…室に…大きな…怪物が」

のび「！！もしかしてあいつ…理科室に移動してきたのか！？」

出来杉「気をつけて…何発か撃ち込んだけど…まったく」

のび「出来杉君！これ以上喋らないで！」

ブルル

ジャ「のび太生きてるか？こっちはもうすぐ学校に着くぜ」

のび「ジャイアン！学校に着いたらすぐに理科準備室に来てくれ出来杉君が怪物にやられたんだ」

ジャ「出来杉が！？いったい何があつたんだ！？」

のび「カメレオンの怪物だ！体育館で見た奴が理科室に移動したらしい！これから何とかしてみる！」

ジャ「待てよのび太！何とかしてどうする気だ！？おいのび…」

ピッ

のび「ジャイアン達まで危険に晒せない…僕だけで何とかしないと」

ガチャッ

白峰「！？おいどうしたんだ野比…こいつ死んだのか？」

のび「白峰さん丁度よかった！まだ息はあります。出来杉を保健室まで運んでいってください」

白峰「やはり何かいるのか…ちょっと待ってるよこいつを運んだらすぐ戻ってくる」

ガチャ バタン

のび「よしっいくか」

（理科室）

グサッ

のび「うわっ！」

ギャオオオオオオオオオ！

のび「やっぱりこいつか今度こそしとめてやる！こいつは姿が見えている時がチャンスだ！」

スウウゝ

のび「消えた！どこだ」

グサッ

のび「うわっそこか」

ダンッダンッ

ザクッ

ダンッダンッ

ダンッダンッ

ドン

ギャオオオオオオオオ！

のび「くそう全然歯が立たないなんて生命力だ」

ギャオオオオオオ！

のび「うわあああ」

のび「ああ…まずい…目の前が…やっぱり僕なんかじゃ…無理だったか…ドラえもん…パパ…ママ…」

ギャオオオオオ！

バリイン！

のび「う…う…んあれ…助かったのか…？」

周りを見るに怪物の姿は無く窓にでかい穴があった」

のび「アイツ外へ逃げたのか？…とりあえず一旦保健室へ戻ろう」

出る前に何かを見つけた

のび「これはパスコード？それに防火シャッターキーだ」

く保健室く

ドラ「はいこれで大丈夫」

のび「ありがとうドラえもん」

ジャ「まったくのび太の癖に何考えてるんだ！」

スネ夫「怪物と一人で戦うなんてどうかしてるぞ！」

はるお「無茶しやがって」

のび「ごめん……でもこれで奴は学校の外に行ったから大丈夫だと思うよこれで校内も安全に……」

バキイ！

白峰「ふざけるな馬鹿野郎！！誰もお前一人で怪物退治をやれなんて言っていないだよ！！その怪我だって自業自得だ！俺と一緒に戦ってたらまださほど怪我しないですんだ筈だ！」

スネ夫「し…白峰さん……」

白峰「いいか！！今大事なのは皆で協力して生き延びることだ！一人で気負いすぎたり、単独でかつこつけるような真似は2度とするな！」

のび「……………はい……………」

ドラ「でも…のび太君のおかげで校内の安全は少しは確保出来たようだよ。今の内に脱出する準備を進めよう」

ジャ「そうだなまずは聖奈さんと静香ちゃん助けに行かないと」

はるお「早くしないとゾンビ共に襲われちゃうよ」

ジャ「俺とスネ夫とはるおで行って来る。警察署でいいもん見つけたんだ俺たちだけで大丈夫だ3人は出来杉と安雄を見ていてくれ」

のび「…うん…」

ジャ「のび太…お前は怪我をしているんだ絶対に無茶するなよ

く数分後く

のび「駄目だよっぱりじつとなんかしてられない…」

ドラ「のび太君、行つてきなよ」

のび「えっ？」

ドラ「どうせ止めても行くんだろっ？わかってるよいいよね白峰さん？」

白峰「……………ただし絶対に一人で無茶するなお前は一人じゃない事を忘れるな」

のび「…ドラえもん…白峰さん…わかったよ！」

再び探索を始めるのび太次回は4階

次回へ

第十五話 「4階の探索」

第十五話 「4階の探索」

「守衛室」

のび「これを差し込んで…」

ピーッ

のび「よしっこれで全部の防火シャッターが開いたぞ」

「4階」

ああ〜

のび「このっ」

ダンッダアンッ

オオオオウ

のび「ん？……あまり知らなかったけど同じ学年の子だ……こんな事する奴じゃなかったのに……こっちは……仲が良かった男子生徒だ……こっちは意地悪だった同じクラスの女子だ……皆……仇はとってあげるよ」

のび太が戻ろうとすると……

うああああ

ああああ

のび「嘘だろ…」

おおおお

のび「やめてくれ」

ああああ

のび「頼むから」

おおおお

のび「頼む……やめてくれ…」

うああああ

パンッパンッ

白峰「大丈夫か野比！」

のび「白峰さん…」

白峰「どうしたんだ一体ぼーっと立ったまま…」

のび「…知り合いだったんです…」

白峰「…そうか…悪いことしたな…」

のび「いいえ…でも…なんでこんな事になったんでしょう…」

白峰「さあな…俺だつて泣きたくなくて来るぜ…俺は下の階を見てくるぜ油断するなよ」

のび「はい…」

プルル

ドラ「のび太君？」

のび「ドラえもん？どうしたんだい？」

ドラ「僕も職員室から携帯を貰つて電話しているんだ。ジャイアン達が聖奈さん達を助けてきたよ。脱出する準備が出来たら戻ってきてくれ」

のび「わかった今から戻るよ」

ピッ

のび「皆の分まで絶対生き残るよ」

く保健室く

ジャ「よしっ全員揃ったな」

のび「静香ちゃん、聖奈さん無事でよかったよ」

静香「心配かけてごめんなさい」

ジャ「へへっこういう時は助け合っのが仲間ってもんだろ」

ドラ「そうだねジャイアンの言うとおりだよ」

安雄「スネ夫と中3の…誰だっけ？」

はるお「白峰さんだよ」

安雄「そうそう白峰さん。その二人がいないぞ」

健治「二人は校内をもう一回見回してもらってるもしかしたら生存者がいるかもしれないからな」

安雄「もし俺がドラえもんに見つけられずのび太に助けてもらわなかったらここに取残されてたかもな」

はるお「俺だってそうさ、のび太に助けてもらわなかったらな」

聖奈「あの…ひとつ聞いていいですか？」

ジャ「どうしたんだい聖奈さん」

聖奈「この青い方は誰か中に入っているのですか？」

健治「そう俺も思った」

ドラ「！……！！」

ジャ「ああそうか聖奈さんと健治はドラえもんを知らなかったな。

ドラえもんはまあ色々あつてのび太のお守りをしているロボットだ」

聖奈・健治「口…ロボット!?!」

出来杉「22世紀から来た猫型ロボットさ。現代の科学じゃ考えられないことだけど」

健治「猫型…?」

聖奈「どこにも…耳なんて…」

のび「わぁーそれだけは言っちゃ駄目!」

ドラ「……………」↑明らかに怒っている顔

聖奈「え!?!ごめんなさい」

ドラ「ハハ…いい気になんてしてないよ…」

健治「(気にしていると思うが…)」

のび「とにかくドラえもんは僕達の仲間で僕の親友だよ。ちょっと抜けている部分もあるけど頼りになる存在だよ」

ドラ「のび太君に言われたくないけど…よろしくね聖奈さん健治君」

聖奈「よ…よろしく願います(結局中に人はいないって事なの?あまりに非現実的なことが多すぎて混乱してきたわ…)」

健治「（おそらく聖奈と同じ事を考えてるな俺…）」

バタンッ

スネ夫「ジャイアン！皆！マズイことになったよ！」

ジャ「どうしたんだ！？何があったんだよ！」

スネ夫「凄まじい数のゾンビがこっちに向かって来ている！！4階の窓から見たんだ！5分もしない内に到着する！」

全員「！！！！」

スネ夫「それだけじゃない！裏庭にはカメレオンみたいな怪物がいるよ！アイツあそこに居座るつもりだ！」

出来杉「アイツが！？」

安雄「逃げ場が無いじゃないか」

ドラ「落ち着いて！手分けして時間稼ぎしよう」

ジャ「まず、聖奈さん、静香ちゃん、咲夜さん、太郎は俺たちが集めてきた物を運び出せるように適当なカバンやバックにつめておいてくれ！安雄と出来杉は警備員室で電子ロックを何とかしといてくれ」

出来杉「やってみるよ」

安雄「出来杉一人でできる気がするが…」

ジャ「で、残りで裏口の確保とゾンビを可能な限り食い止める」

スネ夫「僕はジャイアンと一緒に行くよ」

健治「俺はゾンビ共を食い止める」

はるお「俺も行くよ」

ドラ「じゃあ僕はのび太君と行くよ」

のび「僕は…（アイツとも決着をつけなきゃな…）カメレオンに行くよ」

ジャ「のび太お前は何度もアイツと戦っているから任せたぞ」

スネ夫「死ぬなよのび太！いじめる相手がいないと寂しいからな」

のび「そっちも気をつけてくれよ！いじめてくれる相手がいないと寂しいからね」

ジャ「言ってくれるなあ心の友よ！」

ドラ「僕は上から狙撃と警戒するよ！のび太君気をつけるんだよ」

のび「ドラえもんもねずみのゾンビが出てもパニックを起こさないでくれよ」

ドラ「！……！……？のび太君……やっぱり……」

ジャ「行動開始だ！みんな！後で会おう！」

次回へ

第十六話 「VS バイオゲラspart3」

第十六話 「VS バイオゲラspart3」

（裏庭）

ギャオオオオオ！

のび「今度こそやってやる！もうお前なんかに負けたりしないぞ！」

ガルルル！

ドラ「のび太君！犬だ！犬がいる！」

のび「何！？」

ドラ「僕はどつちかを集中的に狙うよ！」

のび「犬を頼むよ！」

ドラ「犬だねわかったよ！」

チャキツ ↑ 空気砲を構える音

白峰「俺は校門の方に向かう！どうもヤバイみたいだ！気をつけるよ二人とも！」

のび「わかりました！行くよドラえもん！！」

ドラ「うん！」

ダンッダンッ

ギャオオ

ガルル！

ドラ「ドッカーン」

ギャウツ！

ダンッダンッダンッダンッ

のび「どうだ」

ギャオオオオ！

グサッ

のび「おっと」

ダンッダンッ

ドラ「ドカーン！ドカーン！」

ギャウツ！

のび「食らえー」

ダンッダンッダンッダンッ

ギャオオオオオ！

暴れだすカメレオン

のび「うわぁ！しまった銃が！」

ドラ「のび太君！」

ドカーン！

？「うおおおお！」

のび「安雄！？」

安雄「くらいいーやがあれー！」

ドカーン！ドカーン！ドカーン！

ギャオオオオオー！

安雄「これでえーどうだぁー！」

ドカーン！ドカーン！

チャキツチャキツ

安雄「ちっ弾切れか！」

のび「安雄！危ない」

ギャオオオオオオ！

安雄「うおっ危ねえー！」

危機一髪逃れる安雄

安雄「のび太！！今だ！」

のび太は持っていたショットガンを構える

のび「覚悟しろ！怪物め！」

ドォーン！ドォーン！ドォーン！ドォーン！

ギャオオオオオオオオオオオオオオオオ……………

のび「…………やったのか？…」

安雄「恐らく死んだようだな…」

ドラ「やったぞやったんだ！」

のび「やっと倒した！」

安雄「ようやく借りを返したぜ！」

（裏庭）

のび「皆！ようやく倒したよ！」

ジャ「凄げーなあんな怪物3人で倒しちゃうなんて」

静香「3人とも凄いわ」

出来杉「安雄君がいきなり飛び出して心配したけどよかったよ」

安雄「へへっ弾切れの時にはどうなるかと思ったけど借りは返せたぜ」

はるお「すげえーな」

咲夜「凄いわ3人とも」

太郎「凄いや！お兄ちゃん達！」

白峰「何でもいいが早く行こうぜまた何か出てくる前に」

出来杉「裏の扉のロックは解除した皆行こう！」

のび「うん！」

ドラ「おー！」

安雄「ああ！」

ジャ「おう！」

スネ夫「うん！」

健治「ああ！」

はるお「おう！」

静香「ええ！」

聖奈「はい！」

咲夜「ええ！」

太郎「うん！」

次回へ

第十七話 「登場人物&所持武器」

第十七話 「登場人物&所持武器」

名前：野比 のび太

年齢：11歳

特技：射撃

銃器：ハンドガン、ショットガン（後に増えていく）

接近戦：包丁

名前：ドラえもん

年齢：不明

特技：援護

銃器：空気砲（残っていた秘密道具）

接近戦：名刀電光丸（残っていた秘密道具）

名前：ジャイアン（剛田 たけし）

年齢：11歳

特技：馬鹿力

銃器：デザートイーグル（後にロケットランチャーも増える）

接近戦：金属バット

名前：源 静香

年齢：11歳

特技：軽い治療

銃器：ハンドガン、ショットガン

接近戦：キッチンナイフ

名前：骨川 スネ夫

年齢：11歳

特技：狙撃、自慢

銃器：サブマシンガン

接近戦：果物ナイフ

名前：出来杉 英才

年齢：11歳

特技：知識

銃器：ショットガン改

接近戦：中華包丁

名前：山中 安雄

年齢：11歳

特技：爆撃

銃器：グレネードランチャー、手榴弾

接近戦：コンパクトナイフ

名前：緒川 はるお

年齢：11歳

特技：力持ち

銃器：ショットガン、サブマシンガン

接近戦：ブッシュナイフ

名前：緑川 聖奈

年齢：14歳

特技：治療

銃器：ハンドガン改

接近戦：キッチンナイフ

名前：高岡 健治

年齢：14歳

特技：刃物攻撃

銃器：連射式ライフル

接近戦：折りたたみナイフ、サバイバルナイフ

名前：白峰 拓海

年齢：15歳

特技：武器手入れ

銃器：アサルトライフル

接近戦：ファイティングナイフ

名前：桜井 咲夜

年齢：22歳

特技：弾の手入れ

銃器：リボルバー、ワルサー

接近戦：ボウナイフ

名前：山田 太郎

年齢：6歳

特技：狭い場所に侵入

銃器：ハンドガン（咲夜がサポート）

接近戦：ただの棒

次回へ

第十八話 「裏山の道」

第十八話 「裏山の道」

カメレオンの怪物を倒し裏山へ移動するのび太達

のび「ここは確か、学校行事で裏山を登山したりする時に使う登山ルートだったな…土砂崩れがあつて立ち入り禁止になってたっけ…ちよつと進んでみるか…あつ……」

ドサツ

ドラ「のび太君!？」

スネ夫「のび太!？」

聖奈「のび太君!？」

静香「のび太さん!？」

ジャ「どうしたんだ!のび太!？」

ドラ「……貧血みたいだね元々体が強いほうじゃなかったし…」

出来杉「良かった…何か厄介な病気にでもかかったのかと思つたよ…」

白峰「そりゃああれだけ動いたからな」

「山の中」

安雄「大分登ったけど…まだなのか？ちょっと疲れたよ…」

出来杉「ごめん…僕もちっと足元が…」

スネ夫「僕ものが渴いてきた…ちよつと休まない？」

ジャ「皆だらしねえぞ！聖奈さんを見習え！」

聖奈「私は元々運動部でしたし、全然走り回っていませんので大丈夫です」

ドラ「無理はしない方がいいよ、ここで少し休もう」

ジャ「しょうがないな」

聖奈「少し先を見ていきましょうか？」

ドラ「えっ？」

ジャ「聖奈さん」

聖奈「私も少しは皆さんのお役に立ちたいですし…たけし君やドラえもんさん達はここで皆を守っていてください」

静香「聖奈さん私も一緒に行きます、私もそんなに動いてなかったし体力にも自信はあります」

聖奈「いいえ私一人で大丈夫です」

スネ夫「皆で助け合っていていけない状況だし、一人で無茶は…」

聖奈「大丈夫です！任せてください」

静香「聖奈さん！」

聖奈「何かあったら連絡しますそんなに深い山じゃないのですぐに戻ってきます」

スネ夫「聖奈さん焦っていたね」

はるお「別に俺達より年上だからって気負わなくても」

健治「俺達も中学生なんだから一緒にいこうぜ」

白峰「そうだな…女一人に任せられないからな」

聖奈「私だってやるときにやらないと皆の迷惑になるわ」

おい

聖奈「えっ！？」

健治「俺達も一緒に行くぜ」

聖奈「えっ…あの…」

白峰「一人で無茶するなどのび太に言っただお前も無茶するな」

聖奈「健治君、白峰さん」

健治「さあ行こうぜ」

聖奈「はい！」

次回へ

第十九話 「森の中の探索」

第十九話 「森の中の探索」

健治と白峰に合流する聖奈、少し進むと…

聖奈「土砂崩れ…これじゃあ先に進めないわ…ここまで来て」

白峰「ん？…おいこつちに道があるぞ」

右側に道があり進むことに

聖奈「ここは手分けして探索しましょう」

健治「そうだな何かあったら連絡しろよ」

白峰「言われるまでもねえよ」

～聖奈～

聖奈「ここにも死体がある…でも違った服装をしているわ…」

あああ～

聖奈「嘘！？動いた！」

バンッバンッ

聖奈「はあはあ ここも気をつけて行かないといけないようね」

く 白峰く

ガウッガウッ

白峰「くそつ喰らえ!!」

ダンッダンッ

ギャウッ

白峰「どうなってんだ?裏山には殆ど動物はいないだろ」

く 健治く

健治「ここにもゾンビがいるのかよ」

ドッキュン

おううく

健治「早くこことおさらばしたいぜ」

く 聖奈く

聖奈「ここにも…これで一体何人目?やっぱりおかしいわ」

少し進み

聖奈「花の側に何かある……駄目だわグシャグシャで何かわからな

いわ」

キシヤアアアア！

聖奈「！？何！？何の声！？」

く白峰く

白峰「何だ今の声？遠くからだったな…行ってみるか」

く健治く

健治「今の声なんだったんだ？…動物？」

く聖奈く

聖奈「今の声の方に行ってみよう」

おい

聖奈「！？」

ジャキッ

健治「お…おい俺だよ」

聖奈「あつ健治君…ごめんなさいゾンビがあちこちにいたから…」

健治「まあしょうがないそういえばお前さっきの声を聞いたか？」

白峰「俺も聞いたぞ」

聖奈「あつ白峰さん…さっきの声私も聞きました今から行こうと思
っています」

健治「俺もだ」

白峰「じゃあ一緒に行くか」

木が切られた入り口に入る3人

聖奈「…建物？」

白峰「こんな所に…」

健治「一体どうなってるんだ」

キシヤアアアア！

聖奈「何！？こいつ！緑色の「リラ」？」

キシヤアアアア！

健治「アイツこっちに来てるぞ」

白峰「やるしかねえ」

ダンッダンッ

健治「これでも喰らえ」

ズバンッ ↑ ナイフで斬る音

キシヤアアア！

聖奈「えいつ」

バンッバンッ

白峰「オラアア！」

ダダダダダンッ

キシヤアアアアア…

健治「はあはあやったな」

ギヤア！

聖奈「も、もう一体！？」

白峰「クソッ」

キシヤアアアア！

ダンッダンッ

ズバンッ

バンッバンッ

キシヤアアア…

聖奈「はあはあ…こ、怖かった」

健治「もう出てくるなよ…」

白峰「一旦皆を呼ぼうここの建物まで」

プルル

ドラ「聖奈さん大丈夫ですか？」

聖奈「あ、はい」

ドラ「そうよかった健治さんと白峰さんは？」

聖奈「合流して今一緒にいます、森の中にあつた建物の前にいます」

ドラ「そうですかじゃあ今、皆でそっちに行きますので待っていてください」

聖奈「わかりました」

ピッ

聖奈「今、皆が来るので待っていてください」

白峰「そうか…それにしてもこいつは一体何なんだそれとこの建物なんでこんな所に」

健治「さあでも中に生存者がいるかもしれないし脱出方法が見つかるかもしれない中に入ったら拠点を探そう」

聖奈「そうですねまずは皆さんを待ちましよう考えるのはその時にしましよっ」

白峰「そうだな（だがやはりこのゴリラの化け物…気になるな…）」

次回へ

第二十話 「謎の旅館」

第二十話 「謎の旅館の探索」

聖奈、健治、白峰は森の中にあつた旅館を見つけた

聖奈「ここは…」

健治「どうやら旅館のようだな…」

ドラ「昔使用していたところが潰れてそのまま残ったんじゃないかな？」

白峰「怪しいところだな、何かいそうだな」

ジャ「話にあつた怪物か」

聖奈「（もう一体はここから出た気がするけど…もしかして）

ガチャガチャ

あああああゝ

スネ夫「ここにもいるよ！」

ジャ「皆、そこの扉に急げ！」

ガチャ バタンツ

ゝ拠点ゝ

聖奈「のび太君大丈夫？」

のび「ああ…うんちょっとふらついたりしたい…」

聖奈「（顔色が悪い…今はみんなを休ませないと）」

ジャ「怪我人と動けそうに無い奴が増えたからここから動けそうに無いな…何とかしないとヤバイぜ」

聖奈「皆さん！聞いてください残念ですがここも安全な場所とは言えそうにありません。私が館内を探索していきたいと思います」

白峰「お前…俺が言った事忘れたのか？」

出来杉「聖奈さんいくらなんでも無茶だよ」

静香「そうよみんなと一緒に…」

聖奈「のび太君も出来杉君も負傷しています。安雄君も衰弱から回復しきっていませんだから私にいかせてください」

白峰「俺も行くぞ年下のお前に任せられん」

健治「俺も行くぞ」

聖奈「二人とも」

ドラ「確かにこの旅館のことを知らなくちゃいけない任せていいか

い？」

聖奈「もちろんです」

ジャ「よしっ！じゃあ聖奈さん達に探索を任せて俺達は死んでもここを守り抜くぞ」

健治「んじゃ行ってくる」

ガチャ

健治「？開いてないぞ」

チャキツ

男「な、何だよここにもゾンビがきやがったか」

聖奈「え、あ、ちょっと待って！私達は怪物じゃないわ！普通の人間よ！」

男「信じるものか！命が惜しければ早くここから出て行くんだな…ここは…」

ボタン

ドラ「なんだったんだろ？何か知ってそうな感じだったけど」

白峰「どうも何かを隠しているようだったな…」

健治「ならさっさと行こうぜ」

白峰「そつだな見つけたら話を聞こう」

次回へ

第二十一話 「旅館の探索」

第二十一話 「旅館の探索」

＼拠点前廊下＼

白峰「ここは何かやばいような気がする3人で一緒に探索した方がよさそうだがどうだ？」

聖奈「ええそうね」

健治「俺も別にいいと思う」

＼101号室＼

白峰「まずここから順番に探索するぞ」

中に入り

白峰「俺が見張っておくから中を見ておいてくれ」

健治「わかりました」

聖奈「ここは特に…健治君？」

健治「おいこれ見てみるよヘッドがでるぜ」

聖奈「え？」

〈研究員の日誌〉

7月24日

夜、警備員の森山と佐藤、研究員の三田村とポーカーをやった。三田村の奴、やたらついてやがったきつといかさまに違いねえ

7月25日

今日、研究本部のお偉いさん方と本社の方から化け物の世話を頼まれた。皮をひん剥いたゴリラのような奴だ。生きた餌が良いって言うんで生きた豚を投げ込んでみたら奴ら、足をもぎ取ったり内臓を引きずり出したり遊んだあげくやつと食いやる。

7月26日

今日の5時頃、宇宙服みてえな防護服を着た森山に起こされて俺にも着せられた。何でも実験の何かで今日からずっとこの服を着るらしいまったく迷惑な話だ。

7月27日

あまりに背中がかゆいんで医務室に行ったら背中にでけえ絆創膏を張られた。それからもう俺はこの服を着なくて良いと医者が言った。夜になつて背中だけでなく足にも腫れ物ができてきた。それに犬共の檻を見たら数がたりねえ。きつと逃げたに違いねえお偉い方に見つかつたら大変だ。

7月28日

夜、からだ中あつかゆい。胸のはれ物かゆ　かいたら　肉　くさり落ちて　きた　おれ　いたい
どうな　て。　やとねつひい　たら　三田村きた　はら　へたの
で　くた　うまかたです

かゆい

うま END

聖奈「こんな事って…嘘よ気持ち悪い…！」

ボタンッ ああああ

白峰「来やがったぞ！」

ドンッドンッ

おうつうつうう

聖奈「この人たち一体何を研究してたの…？」

白峰「こいつから201号室の鍵を見つけたぞ」

く廊下く

聖奈「102号室の鍵が必要ね…随分古いけど…」

健治「なら俺がやってみる」

ガンッガンッ

バキィ

健治「よしっ開いたぞ」

「102号室」

白峰「ここは弾とハーブしかないな」

聖奈「これでもまだ良い方ですよ」

「103号室」

健治「ここも特に無いな」

白峰「それにしてもさっきの男どこに行ったんだ？」

「104号室」

聖奈「もうひとつ扉があるわ」

白峰「行ってみるか」

中に入り…

健治「猟銃があるぞ取ってみよう」

白峰「この猟銃まだ使えるぞ聖奈お前が使ったらどうだ？」

聖奈「えっ…でも良いんですか？」

健治「俺は構わないぞそれにお前は女なんだしこんくらの強い銃は持っておけ」

聖奈「わかりましたありがとうございます」

ビーン

ガチャツガチャツ

聖奈「あれ？おかしいわね開かないわ」

白峰「どいてろいまやってみる」

ガンツガンツ

白峰「変だな…健治お前も手伝ってくれ」

ガンツガンツ

バキィ

健治「よしっ開いた」

く休憩所く

ダンツダンツ

バンツバンツ

キシヤアアアア

白峰「フウ…」

健治「こっちの男湯は俺達が行くからお前は女湯を頼む」

聖奈「あっはい」

〽男湯〽

ドンッドンッ

バンッバンッ

ダダダダンッ

〽女湯〽

聖奈「向こう側から銃声が…」

健治「よう何か見つかったか？」

聖奈「あつたのは102号室の鍵がありましたけどさっき壊しちゃったから…」

白峰「なら次に行ってみようぜ」

〽2階〽

健治「思ったんだがあの日記といいこの最近まで使われたような綺麗な自販機…妙だと思うが」

聖奈「ここってやつぱり旅館なんかじゃ…」

白峰「それは調べてからの話だまだ探索してないところもあるんだからな」

聖奈「気をつけて探索しなきゃ」

く201号室く

聖奈「この本棚動かせそうだわ」

ゴゴゴゴ

聖奈「地下がありますね」

白峰「先に他を探索してからにしようぜ」

聖奈「そうしましょう…」

く広間く

健治「電子ロックの様だな」

聖奈「私がやってみます」

ピーッ

白峰「ここは酒樽を置いておく倉庫だな」

聖奈「中にはエンブレムがありました」

健治「こっちは弾と救急スプレーだ」

中を出た3人

白峰「後は大広間への扉か」

聖奈「でも、鍵なんて見当たらないし…」

健治「やってみるか」

ガンッガンッガンッ

バキィ

白峰「よしっ開いたぞ」

聖奈「何があるのかしら」

健治「油断大敵だぜ」

ガチャ

次回へ

第二十二話 「VSフローズウィニトル」

第二十二話 「VSフローズウィニトル」

～大広間～

男「おい！お前ら！早くここから逃げろ！」

聖奈「あなたは…！どうしたの！？その怪我！」

男「奴ら天井裏に潜んでやがった…クソッせつかくワクチンを打って生き延びたつてのに！」

白峰「どう言う事だ！詳しく説明し…！！？」

ギャオオオオオオオ！

男「ひいっ！た…助け…」

化け物が男の両側に着地し男の上半身、下半身を掴み引っ張り合う

男「うつ…がっ…はっ…」

ブチィッ！

ギャオオオオオオ！

威嚇する化け物

健治「戦うしかなさそうだな…」

白峰「ちょうど3匹いる一人一体だな」

ギャオオオオ！

ダンッダンッ

ギャオオ！

ダダダダンッ

聖奈「えいつ」

ダンッダンッ

白峰「クラエエエエエッ！」

ダダダダダダダンッ

ギャオオオオオオオオ……

白峰「よしっ倒したぞ」

聖奈「白峰さんこっちを頼みます」

白峰「任せろ！」

健治「くそっ」

ダンッ　ズバンッ

ギャオオ！

白峰「緑川！援護しろ！」

聖奈「はいっ！」

ダンッダンッ

ギャオオオ！

ダダダダダンッ

ダンッダンッ

ギャオオ！

聖奈「キャア！」

白峰「おいっ平気か？」

聖奈「何とか」

白峰「くそっ」

ダンッダンッ

聖奈「えいっ」

猟銃で攻撃する聖奈

ドォンドォン

ダダダダンッ！

ギャオオオオオ……

白峰「やったぞ」

聖奈「白峰さん健治君を早く」

白峰「ああ」

健治「はあはあ……やばいな……」

ギャオオ！

聖奈「健治君大丈夫？」

健治「ああちよつとヤバイ」

白峰「一斉に撃つぞ」

ダダダダンッ

ドォンドォン

ダンッダンッ

ギヤオオオオオオオ……

健治「やったな……」

聖奈「ええ」

白峰「しかしこいつ一体何なんだ」

健治「ああ……ん？向こうに部屋があるぞ」

聖奈「行ってみましょう」

ガチャッ

……ググッ……

白峰「こっちに管理人室の鍵があったぞ」

聖奈「こっちはバッテリーがありました」

健治「そろそろ行こうぜ」

ガチャッ

ギヤオオオオオオオオオ！

聖奈「嘘！なんで？」

健治「こいつら生き返ったのか！？」

白峰「やばいぞ一旦逃げろ！」

バタンッ

健治「何であいつら生き返ったんだ」

白峰「わからねえ事ばかりだ学校のカメレオン、人型の虫、そして生き返るゴリラのような化け物どうなってるんだ」

聖奈「わかりませんが今は調べれば何かわかるかもしれません」

健治「そうだなさっき見つけた鍵のところに試してみようぜ」

↓地下↓

白峰「あつたぞ管理人室だ」

ガチャッ

聖奈「えーと…机の上に本がある」

健治「こっちの箱の上にもあつたぞ」

白峰「最後の書の上と下だな…」

聖奈「中には…メダルがありました」

健治「こっちにもあつたぞ大鷲が描かれてるぞ」

聖奈「これは…狼です」

白峰「何のメダルだ…？」

健治「さあ…」

「2階204号室」

聖奈「こっちの部屋にまだ奥があります」

「石碑の部屋」

健治「この石碑大鷲と狼の絵が描かれてるぞ」

白峰「さっきのメダルはめてみればどうだ？」

カチャッ

ゴゴゴゴゴゴ！

聖奈「階段が出ました！」

健治「行ってみようぜ！」

「エレベータールーム」

白峰「こんな所にエレベーターがあるぞ」

健治「だけど電源が入ってないな…」

聖奈「ここまで来て…」

白峰「ん？おいここに何かはめるところがあるぞ」

健治「あ！本当だ」

聖奈「もしかしてこのバッテリー……」

ビー……ッ

健治「動いたぞ！」

聖奈「一回皆の所に行きましょう」

白峰「そうだな」

く拠点く

聖奈「ゾンビの死体が……」

健治「何があつたんだ」

スネ夫「窓や扉から何体が押し入ってきたけど何とかなつたよ」

静香「こわいわ……」

ジャ「嫌な予感がするぜまだ何か見つからないのか？」

聖奈「そうだ！エレベーターを見つけたんです」

白峰「全員移動するぞ」

くエレベーター内く

のび「聖奈さん、健治さん、白峰さんご苦労様。もう大丈夫だよ」

ジャ「後は俺達に任せて休んでいてくれ」

聖奈「ええでもこの旅館にも化け物としか言いようのない生物がいました。もしかすると…」

フラッ

健治「おっと！危ない」

白峰「聖奈！？」

ドラ「……大丈夫疲れて倒れたただだよ」

のび「こんなにボロボロになって…ここからは僕達でがんばらないと！」

はるお「健治さんも白峰さんも大丈夫ですか？」

白峰「ああなんとか…」

健治「俺も大丈夫だ」

ジャ「皆で必ず脱出するぞ！」

次回へ

第二十三話 「地下の坑道」

第二十三話 「地下の坑道」

↓地下↓

のび「坑道か…？どう見ても下水道とは思えないし…」

出来杉「どうなっているんだ…あの旅館は…」

ジャ「今度は何が出てもおかしくないな。次は巨大蛇かそれとも巨大蜘蛛か…」

静香「どっちも嫌よ…」

安雄「この先に何かあるんだ？」

はるお「わからねえ…」

白峰「まあ、あんな山奥に地下道まで掘ってあるんだ何かあるだろ」

出来杉「僕達の知らない間にこんな物が裏山に作られていたのか…」

ドラ「今は考えてもしょうがないよ…とりあえず先に進もう」

健治「！？おいちょっと待てよ俺の携帯が圏外になってる」

スネ夫「僕のもだ」

咲夜「私のも」

出来杉「そうか…地中で電波が届かないのか…これでは分散するのは危険すぎる！」

のび「よしっここは休んでいた分僕が行くよ」

ジャ「おい、のび太…」

のび「この中で一番早いのは僕だけだよ、何かあった時でも僕一人なら何とか振り切りやすいでしょ、ジャイアン達にいじめられてたおかげで逃げ足だけは自信あるからね」

白峰「のび太またお前一人で…くっ…」

スネ夫「白峰さん!？」

白峰「くそっ俺もどうやら疲労が溜まってたらしいな…」

健治「そういえば俺も疲れてきたぜ…」

ジャ「白峰さんここはのび太に任せましょう、のび太の逃げ足なら俺達も良く知っているし、それに俺達はここで負傷者の手当てやこの守備をしなくちゃならない」

白峰「……わかっただが危険なときはすぐに戻って来いよ」

のび「わかりました」

ダッダッダッ

のび「そういえばこのあたりいる軍隊の死体…何かあるかな？」

ゴソゴソ

のび「グレネードランチャーだ！それに弾もある！安雄の持っているのはタイプが違うけど使えそうだぞ！」

そして少し進み…

？「そこにいるのは誰だ！？」

のび「！？あなたは…」

？「こ、子供！？どうしてこんな所に！？」

のび「あなたは一体…」

？「この際誰でもいい…聞いてくれ坊主！俺達救助チームに裏切り者がいる！あいつは奴らのスパイだったんだ！」

のび「スパイ？一体どう言うことですか？」

？「黙ってきてくれ！俺達は生き残りの救助のために派遣されただが奴は違った！アイツはデータの回収と言っていた作戦にしか過ぎなかったんだ！アイツがどこのスパイか今から言うアイツは…」

バンッ

のび「誰だ！！」

バタッ

のび「…心臓を打ち抜かれている…足も酷い怪我をしている…恐らく身動きが取れなかったんだろう…何か持っている、これってクランク？」

キシヤアアア

のび「！？こいつ学校で死んだ…」

キシヤアアア

のび「このっ！」

バンッバンッ

のび「ふうこの先行き止まりか…戻るか」

ゝ拠点ゝ

のび「ここにも…」

ジャ「予感的中だ！ここにも何かありそうだぜ！」

太郎「のび兄ちゃん気をつけて」

のび「うん」

少し進み

のび「ここはクランクを使うのかな」

クランクを回す

のび「よしっ」

そして進み

のび「何でいわがぁぁー」

ドッカーン

のび「ぜえぜえとりあえず進めた」

果たしてその中であつたのは…

次回へ

第二十四話 「この事件の真実&VSブラックタイガー」

第二十四話 「この事件の真実&VSブラックタイガー」

のび「！？…誰がいる…」

？「ああ、作戦は成功だ、もちろん実戦データも回収し、アレも回収した、予想以上にいいデータ取れたので今そちらに送りました。ちゃんと救助チームも始末しておいた、生存者は私一人だけです。証拠？証拠なんて残りませんよ。政府には原子力発電所の事故と伝える手筈です。全てが終了したい町ごと…ではこの辺で…」

ピッ

のび「あなた一体誰なんだ！ここは…」

？「何だ！？お前は！！どうしてここにいる！？…まさか政府の奴らか！？クソッ、もう嗅ぎ付けたか…」

のび「な、何を言ってるんだ一体…」

？「（どうやら違うようだな…それに良く見たら餓鬼じゃないか…ん？こいつまさか例の…いや間違いない…）」

のび「？どうしたんだ…」

？「フッフッフ良いだろう教えてやる…俺は大薬品企業アンブレラの幹部だ！」

のび「な…アンブレラだと!？」

幹部「覚えているか?…2日前、お前の家に俺らの社員が来たことを…」

のび「…来たがそれがどうしたんだ」

幹部「その社員がお前に渡したものが『ヤサシクナル』だったか?それを渡したはずだそしてお前は俺達の計画どおり撒いた…」

のび「ま、まさか…」

幹部「そう、お前に渡したのはそんなくだらん物じゃない我々が開発した感染ウイルスだ!」

のび「ウイルスだと!でも何でそんな物を僕に…」

幹部「お前の日常を全て調査させてもらった…お前は町一番の駄目少年だからな、我々が撒くと政府にかんずかれてしまう、それでお前に撒いてもらったわけだ」

のび「そ…そんな…」

幹部「そしてこの惨劇の町にいる化け物共がいるだろう俺はそういったの実戦データを回収するためにここに来たそして例の…」

のび「例の…?」

幹部「おっとおしゃべりが過ぎたな、お前はここで死んでもらう我々の実験の協力感謝する」

のび「くっ」

スッ

バンッ

のび「…！」

幹部「妙な真似をするなよそこでじっとしていろお前もあいつらと同じにしといてやる」

のび「クソッ」

ギャオオオオオ！

幹部「何だ！？」

ズンッ！

天井から大きな蜘蛛が現われた

幹部「何だこいつは！？うわっく、来るなあ！」

ビシャー

大量の糸を吐き出す蜘蛛

幹部「うわっ！？い、糸が絡まって……うわああ……」

ギャオオオ！

のび「逃げられそうに無い……！ここで戦うか！」

ビシャー

のび「危ない！」

何とか糸をよけ銃を構える

バンッバンッ

ギャオオオ

バンッバンッバンッバンッ

ビシャー

バンッバンッ

ギャオオオ！

のび「これならどうだ！」

グレネードランチャーを構えるのび太

のび「喰らえ！」

ドカーン！ドカーン！ドカーン！

ギャオオオ

ドカーアンドカーアンドカーアンドカー

ギャオオオオオオ……

のび「ふう……やったか……ん？これは……」

男が落ちた穴の近くに銃があった

のび「コ……ルト……パイソンそう書いてあるな……結構大型の銃だ！」

のび太は先に進み……

のび「ここは……エレベーターがあるここから先にまだ地下がある
みたいだな……一旦皆を呼ぼう」

（数分後）

ドラ「のび太君お疲れ様………どうしたの？なにかあったの？」

のび「実は……」

のび太はさっきの男の話を皆にするそして全ての元凶も……

のび「……ということなんだ」

ドラ「それじゃあ家に来たのもそれが狙いだっただのか……」

出来杉「全てはアンブレラのせいだったのか……」

のび「いや…僕が撒いたからこんな事に…」

ジャ「いやその日俺とスネ夫がのび太をいじめたから」

スネ夫「そうだよいじめなければこんなことには…」

健治「いや…全てはアンブレラのせいだ」

白峰「そうだな俺達の家族や友人まであんな化け物にしまったんだ」

安雄「俺の父ちゃんや母ちゃんも」

静香「私の友達も…」

聖奈「…皆さん今は生きることが大切です家族や友人のためにも…」

咲夜「そうね」

出来杉「それにこの地下に行けば脱出が出来るかもしれない」

のび「…そうだね行こう皆」

全員「おお、ええ、はい、うん」

そして全員エレベーターの中に入り地下に進んだ

次回へ

第二十四話 「この事件の真実&VSブラックタイガー」(後書き)

気付きましたか?この小説のオリジナル『のび太のバイオハザード』

本家では仲間の数人は死んでいますがこの小説は死なないようにしてあります

それとG版の咲夜さんも出しておきはるおもいます

勝手ながら申し訳ありませんがこれは個人的にやっているのですそのつもりで

第二十五話 「地下の研究所」

第二十五話 「地下の研究所」

「研究所」

のび「着いたね」

咲夜「やけにゾンビが多いわね」

安雄「なあ出来杉、こんな所に立派な設備があるのはどう思う？」

出来杉「ありえないの一言だね。明らかに鉱山の規模じゃないね…でもアンブレラならありえるかもしれないねきっと重要な施設に違いない」

スネ夫「だ、大丈夫なの？僕達そんな所に入ってタダで済むの？」

ジャ「情けないこと言ってんじゃねえぞスネ夫！」

出来杉「でも、逆に考えるとチャンスかもしれないよ」

ドラ「確かにね。こんな地下に研究所があるなら非常用の脱出経路があるかもしれない」

はるお「なるほど…」

白峰「そんなに上手いくのか？」

ジャ「……だが今は出来杉の推測を信じるしかないな」

エレベーターから降りて少し進んだ先に……

健治「おい皆見てみるよ！ビンゴだ！非常用脱出経路だ！」

聖奈「……でもまだ使えないみたいね」

出来杉「使うにはこの研究所内を非常事態にしなきゃいけないようだね」

ジャ「それじゃあ太郎と咲夜さん、聖奈さんに静香ちゃんはここを守ってくれ」

太郎「うん！」

咲夜「任せて」

聖奈「わかりました！」

静香「わかったわ」

ドラ「じゃあ残りはこの梯子から下を探索だね」

白峰「よし！いくぜ健治！」

健治「よっしゃあ！」

武器を整えて下に降りる白峰と健治

ジャ「俺達も行くぜスネ夫！」

スネ夫「待つてよ！ジャイアン！」

次にジャイアンとスネ夫が降りていく

安雄「じゃあ行こうぜはるお、出来杉！」

出来杉「そうだね」

はるお「よしっやるぜ」

銃のチェックを終えて探索を始める3人

ドラ「それじゃあ僕達もそろそろ行こうかのび太君」

のび「うん」

最後にドラえもんのび太が探索を始める

探索チーム

白峰・健治チーム

ジャイアン・スネ夫チーム

安雄・出来杉・はるおチーム

のび太・ドラえもんチーム

太郎・咲夜・聖奈・静香は待機

アンブレラの研究所を探索するのび太達…

次回へ

第二十六話 「研究所の探索」

第二十六話 「研究所の探索」

アンブレラの研究所を探索することになったのび太達

のび「分かれ道のようなね…」

ドラ「それじゃあ僕は右に行くからのび太君は左に」

のび「うんわかったよ」

↳ 映写室↳

のび「これは電子ロック式の金庫だなやってみよう」

↳ 数分後↳

のび「これだ！」

ピーッ

のび「やっと開いた中には…小実験室の鍵だな……」

↳ 地下一階↳

ウィン

のび「ジャイアン、スネ夫！」

スネ夫「凄い施設だよ！道に迷わないようにしないと…」

ジャ「でかい上に化け物だらけだ…一体ここで何があったんだ？」

〈資料室〉

のび「こいつら何だ！？他のゾンビとは違うぞ」

うわあああ

のび「このっ！」

バンッバンッ

おおおう

のび「ふう…さてこの部屋を探索するか」

探索中

のび「スライドフィルターとX写真があったなさっきの映写室で何が見れるのかな？」

〈映写室〉

のび「これでいいのかな」

〈アンブレラ極秘研究資料〉

TOP SECRET

- M A - 3 9 ケルベロス

- M A - 9 6 バイオゲラス

- M A - 1 2 1 ハンター

- T - 0 0 2 タイラント

のび「これは…化け物のデータか…まだ他に新しい化け物がいるかも知れないな…気をつけないと」

↳ 通路↳

のび「この通路は部屋が多いな1つ1つ探索しよう」

そして…

のび「結局、カードキー1つだけだったな次の部屋に行こう」

ウィン

のび「ここは何だ？それにこのカプセル…！？」

カプセルの中に映写室にいた筋肉が剥き出しのゾンビがいた

のび「こいつは改良版のゾンビか？それにしても酷い有様だな…」

のび「次はここは武器庫か…でも鍵がかかってるこのカードキーは

使えるかな？」

シュツ

ピーッ

のび「よしっ開いたぞ！いい武器があると良いけど」

中を探索中

のび「結構あつたなでもこの量をどうしよう…」

ジャ「おーいのび太」

のび「ジャイアン！それにスネ夫！」

スネ夫「凄いなこんなにたくさんの武器がある」

ジャ「おい見ろよこれ俺にぴったりの武器じゃねえか？」

スネ夫「ジャ、ジャイアンそれロケットランチャーだよそんな物持つなんて凄いな」

ジャ「へへ俺の力があればこんなもの余裕だぜ」

のび「そつだジャイアンとスネ夫この武器を運ぶのを手伝って」

ジャ「任せられよ」

スネ夫「それでどこに運ぶの？」

のび「とりあえず静香ちゃん達が待機してる所に運ぼう」

↓数十分後↓

静香「凄いわこんなにたくさんの武器」

のび「それじゃあ僕達はまた探索を続けるよ」

聖奈「がんばってください」

次回へ

第二十七話 「VSタイラント」

第二十七話 「VSタイラント」

ジャ「それじゃあ俺達はまた探索しに行くからな」

のび「うん気を付けてね」

スネ夫「お前もなのび太」

のび「さて後はエレベーターでF4に行くだけか…」

　　エレベーター前へ

のび「さて行くか」

？「のび太君！」

のび「出来杉君！安雄たちは？」

出来杉「今は別行動をしているんだ」

のび「そう、後はこの先だけだよ」

出来杉「うん、それよりもとんでもない物を見つけたんだ。行きながら話そう」

のび「…？うんわかったよ、とにかく進もう」

ウィイン

（F4）

のび「それで何を見つけたんだい？」

出来杉「この施設に関する情報と何故この施設まで感染してしまったのか、それを研究員の遺体から見つけたんだ」

のび「そういえばここもアンブレラの施設なのに何でここまで感染しているんだ？」

出来杉「その事は後で話すよ、まず聞いて欲しいのはのび太君が撒いたウイルスについてだ」

のび「感染ウイルスだけど…」

出来杉「その感染ウイルスがとんでもない物なんだそれは『T-ウイルス』」

のび「『T-ウイルス』？」

出来杉「正式には『Tyrant Virus』。生体の遺伝を組み替える始祖ウイルスと言う物を強化したもの…あらゆる生物を突然変異させ肉体や凶暴性を強化する生物兵器の主体となるウイルスと書いてあった、もし人間に投与すれば死んだ細胞も復活させられるかもしれない…医療や軍事に応用すれば、歩行不可能な人の足を元通りに出来るかもしれないだ。でも投与しても抗ウイルス剤を投与し続けないと細胞が突然変異を起こし体が耐えられなくなり死に至る、そして死んだ人間は再び蘇り突然変異の影響で皮膚の腐敗

が進行。ゾンビになるらしい……」

のび「彼らはそのウィルスにおかされてあのような姿に…僕のママも…もう死んでいたのか…」

出来杉「残念だけど…そうなる死んでいった家族や友達のためにも生きていこう」

のび「…うん…」

出来杉「そして彼らの異常な生命力の源となっているのは急速に働く新陳代謝機能。これにより常に膨大なエネルギーを供給を必要とするために一定の行動を取り続けるとレポートには記されていた」

のび「一定の行動…？まさか…！？」

出来杉「その通り。食べることだ。信じられないウィルスだよ…だけれど何故僕達がこのウィルスに感染していないのかはわからない…とにかく、街は完全に汚染されてしまった。」

のび「…だね…」

出来杉「そしてこの施設まで感染したのは理由があるんだ」

のび「理由…？」

出来杉「この施設は他の施設に比べてはるかに研究が進んでいたそこでアンブレラは反逆を起こされるのを恐れてこの施設ごと感染させたここの研究員達に知らない間に…」

のび「僕に撒かせた理由はそれもあつてからか…」

出来杉「ここからが重要なんだ…このフロア…F-14のエレベーター先、最重要機密フロアには、奴らの研究の集大成があるらしい。」

（研究室）

のび「何だ…この部屋は？」

出来杉「ここが最重要機密室か…！？のび太君あのカプセルに何かいない！？」

のび「カプセル……………！？」

カプセルの中にいたのは巨大な人型の化け物だった

出来杉「な、なんて化け物なんだ！」

のび「こんなもののために僕達は…」

出来杉「僕達だけじゃない…家族も友達もみんな…！こんな物を外に出すわけにはいかない！のび太君！僕はこの施設を破壊する手段を探す！ココでこいつが完全したら僕達の街以外に危険が晒される化もしれない！」

ダッ

ウィイイン

のび「出来杉君！」

ピーッ

のび「えっ？」

ゴボゴボ

のび「何だ勝手に動き出した！」

シャアアアア…

ドカツ！ドカツ！ドカツ！ドカァン！

グオオオオオオ！

のび「逃げられそうに無い…戦うしかないか」

グオオオオオオ！

のび「喰らえ！」

コルトパイソンを構える

ドオン！ドオン！ドオン！

グオオオオオオ！

のび「うおっ」

大きな爪を向けてきた化け物

グオオオオオ！

のび「くっ」

間一髪逃れた

のび「射程距離を取ろう」

ダッダッダッ

ドオン！ドオン！

グオオオオオ！

走り出した化け物

ダッダッダッ

のび「速い！」

グオオオオオ！

爪を向ける化け物

のび「させるか！」

爪に向かって撃つのび太

第二十八話 「研究所の脱出」

第二十八話 「研究所の脱出」

のび「さてと、出来杉君どこに行っただろう?」

ビーンビーン

「The destruct mechanism for the emergency started」

「It repeated, and the destruct mechanism for the emergency started」

「Each research must escape to the fifth in the underground platform with the going train by promptly using the escape route」

のび「?????」

出来杉「みんな、聞こえているかい!今、館内の放送を使って呼びかけている!聞いてくれ!」

のび「出来杉君!」

出来杉「館内の自爆装置を起動したけど、予想以上に早く作動して

しまつみたいだ！急いで地下一階の聖奈さんたちがいる緊急避難経路前に集まるんだ！図面によるとそこから先に列車がある！列車に乗れば街からも脱出できる！とにかく緊急避難経路に集まって！！」

のび「出来杉君…本当に破壊するつもりだったのか！」

出来杉「のび太君！聞こえてたら、研究所西の地下3階にある機密情報管理室に向かつてくれ！そこにまだ実験データが残されているらしい！それを持って脱出出来ればアンブレラを追及する重要な手がかりになるはずだ！」

のび「西の地下3階結構遠いけど…大丈夫かな」

出来杉「できるだけ急いでくれ！2分以内に管理人室のロックが固定される！そうしたらもう開けることができなくなるんだ！急いでくれ！」

のび「何てことだ！急がないと！」

「地下3階」

のび「ここの奥か！」

のび「開かないな…その機械が開ける鍵になっているのかな？…
…どうやらそのようだな…パズルを解かないと解除ができないみたいだ…」

アナウンス「機密情報室へのロック固定作業を開始します。解除猶予時間は1分です。」

のび「何だって！急がないと！」

5…4…3…2…1…

ピーッ

のび「よしっ出来た！これでロックは解除された！」

〈機密情報室〉

のび「その金庫かな？」

のび「…何か難しい書類が入っている。きっとここで何が行われていたのかを記した物に違いない！！やったぞ！これで決定的な証拠を手に入れることが出来た！！後はここを生きて脱出するだけだ！！」

〈緊急避難経路〉

ジャ「のび太こっちだ！後はお前だけだ！」

出来杉「やったね！のび太君！後はここを離れるだけだよ！列車は自動操縦だ動き出せばもう大丈夫さ」

スネ夫「急げ！のび太もうすぐここは消えてなくなるぞ！」

安雄「これで地獄ともおさらばだ！行こうぜのび太」

はるお「皆でここを脱出だぜのび太！」

静香「無事ここを出られたらシャワーが浴びたいわ行きましようのび太さん」

咲夜「私も浴びたいわ早くしまししようのび太君」

健治「ここを脱出できるなんて思ってたぜなあ のび太」

白峰「…さっさとここを出たいぜ… のび太」

太郎「行こう！ のび兄ちゃん！」

聖奈「こっちです。急いで のび太君」

ドラ「やっと希望が見え始めたね行こう！ のび太君」

くプラットフォームく

ドラ「急いで のび太君！ 何時でも発車できるよ！」

のび「何とか間に合った…… よし行こう！」

すると

ドッカアアアン！

グオオオオオオオ！

ドラ「ば… 化け物だ！」

のび「あいつ死んでなかったのか！」

のび「先に乗るんだドラえもん！僕がアイツを倒す」

ドラ「のび太君！？」

のび「話している暇は無いんだ！早く」

ドラ「わかった気をつけて！」

のび「行くぞ！化け物！」

バンッバンッバンッ

グオオオオオオ

バンッバンッ

のび「グレネードでどうだ！」

ドカーーン！ドカーーン！

グオオオオオオ！

のび「ならさっき見つけたマグナムで！」

ドン！ドン！ドン！

グオオオオオオ！

ドン！ドン！ドン！

グオオオオオ！

のび「クソッなんて生命力だ！」

グオオオオオ！

のび「危ない！」

ズザーン

のび「ふう危なかった！」

ジャ「のび太！」

のび「ジャイアン！」

ジャ「俺の愛用品だちよつと重いが何とか上手く扱え！」

のび「よしっ」

ロケットランチャーを構えてタイラントに向ける

のび「くらえええええええ」

ドカーン！

放った弾がタイラントの心臓らしきものに貫通

グオオオオオオオ...

ドカーーーンッ！

のび「はあはあ、やった…か」

（電車内）

のび「終わったな…僕達は助かったんだ！」

スネ夫「でもこれからどうすんだよ…全てを失った今、一体何を生きていけばいいのか…」

聖奈「そうね頼る人もいないし事の全てを話を誰かに話しても信じてもらえないわ」

ジャ「そんな事は後で考えようぜ俺達にはまだ明日があるんだ！今は助かったことを皆で喜び合おうぜ！」

健治「そうだな」

白峰「そういえば今まで寝てなかったから俺は寝るぜ」

安雄「俺もクタクタだ」

太郎「僕も」

咲夜「皆も寝ましょう列車は自動操縦だから」

のび「そうだね」

く数時間後く

ガタン！

聖奈「…どうやら着いたみたいね…」

ジャ「ようやくまともな人に会えそうだぜ」

スネ夫「だね、まずは警察に行こうか」

くプラットフォームく

スネ夫「静かだね…」

ジャ「そうだな…」

その時、何処から声がして…

うわああ…

ゾンビが現われた…

ジャキツ↑ロケットランチャー

ジャ「…どうやら俺達の進む道は見つかったようだ」

チャキ↑ハンドガン改

聖奈「…そうね、はつきりしたわね」

チャキ ↑ ショットガン改

出来杉「アンブレラ…必ず追いつめてみせる！」

ジャキツ ↑ サブマシンガン

スネ夫「僕はみんなについて行くさ、アンブレラと戦うなら一緒に…ね」

カシユ ↑ 空気砲

ドラ「僕のいた22世紀にはない出来事だ…歪んだ歴史は元通りにしないとね！」

ジャキツ ↑ グレネードランチャー

安雄「なーんでこんな事になっちゃたんだろうな？」

ジャキツ ↑ ショットガン

はるお「絶対に生き残ってやるみんな一緒に！」

チャキ ↑ アサルトライフル

白峰「許さねえぞ…アンブレラ！」

チャキ ↑ ライフル

健治「やられた分の仕返しをしないとな」

チャキツ ↑リボルバー

咲夜「そうね死んでいったみんなの分もアンブレラにやり返さなきゃ」

チャキツ ↑ハンドガン

静香「私だって…皆と一緒にがんばるわ」

太郎「僕もがんばるよ！」

チャキ ↑ハンドガン

のび「僕も、皆と同じ考えさ。大丈夫、みんな一緒ならきつと乗り越えられるさ。今までだってそうだったじゃないか！」

ジャ「へへっ」

スネ夫「ああ！」

聖奈「ええ！」

出来杉「そうだね！」

安雄「おう！」

はるお「よしっ」

健治「おお！」

白峰「…ああ！」

咲夜「そうね！」

太郎「うん！」

静香「ええ！」

ドラ「行こう！のび太君！」

のび「よし！行くぞ！」

ドオン！

終わり

第二十八話 「研究所の脱出」(後書き)

どうも見てくれてありがとうございます

まだ終わりじゃありません第2部もありますので

よろしくお願いします

後第2部も『オリジナル』なので

No.1 「悪夢再び」

No.1 「悪夢再び」

12/25

僕達の町は5ヶ月前にある会社の実験でなくなってしまった…
そしてこの街もまた…

～1週間前～

のび「それじゃあ行ってくるよ…」

ドラ「気をつけてねのび太君僕達も一緒に行きたいけど負傷者の手
当てが終わっていないからいけないよ」

聖奈「任せてください私もいますし…早くアンブレラの情報をつか
まないと」

僕達の町はアンブレラによって破壊され今は感染もない安全な街
中で住んでいるそしてアンブレラの情報をつかむため各地にあるア
ンブレラの支部を探索するもちろん僕と聖奈さん二人が最初の探索、
もう1つの日本の支部がある街に行く僕達の感染された町とこれか
ら行く場所2つが唯一の研究施設である

のび「聖奈さん大丈夫？またあのような事があるかもしれないん
ですよ」

聖奈「大丈夫です私も前の自分ではありません」

出来杉「のび太君、聖奈さんあまり無茶しないようにしてください」

ジャ「のび太、聖奈さんを絶対に護れよ」

のび「わかってるよ」

そして現在…悪夢が再び…

ああああ おおおおお

うあああ

のび「ハアハア…喰らえ！」

バンッバンッ

オオオオオ・・・

のび「聖奈さん…一体何処へ…」

ああああ

のび「！何処か安全な場所は…あの倉庫…入ってみよう」

ぎぎぎぎ...

？「動くな！誰だ！」

のび「ま、待ってください！僕は普通の人間です！」

ガチャ

？「すまない、勘違いをしてしまった私はここの街の警察官だ」

のび「ここは…」

警官「ここまで来た生存者達だ」

あああ　おおお

のび「!?!」

警官「まずい奴らが来た坊主手を貸せ！」

のび「は、はいっ！」

ガシャンッ　ガシャンッ　ガシャンッ　ガシャンッ……

警官「どうやら行ったようだ…」

のび「落ち着いたみたいです」

おっさん「落ち着いた!?!これのどこが落ち着いたんだ!?!冗談言うな!俺の妻や息子まで奴らに殺されたんだぞ!冗談じゃない!」

警官「落ち着いて!まずは現状の確認を…」

おっさん「現状!?!現状ははっきりしているじゃないか!地獄!それ以外何がある!?!俺はもうここから一步も出ないぞ!救助が来る

まで絶対に動かん！」

警官「駄目だこのままでは皆パニックを起こしてどうなるかわからなくなる…坊主すまないが外の様子を見ていつてくれないか？危ない目にあいそうになったらすぐに逃げるんだぞ」

のび「はい（何時までもここにいられない…何とかして奴らの情報と脱出手段を探さないとそれに聖奈さんを探さなきゃ出ないと皆にあわせる顔がないよ）」

警官「そうだ万が一があるかもしれないこれを…」

そうすると銃を渡す

のび「大丈夫です自分のものがあります」

警官「？なぜそれを持っているんだ」

のび「えっ！？あつ！その…拾ったんです…」

警官「そうか扱い方はわかる？そうか、だがなるべく使わないようにしろ」

のび「はい（持ってきたなんて言えないし…それにしても何で銃を持ってきてもばれなかったんだろっ？）」

そして倉庫から出て様子を見に行くのび太

のび「ゾンビが多いなそれもそうか前はこの街は人口が多かったし」

車のバリケードで張られている近くに警官が立っていた

のび「あの……」

警官「……………」

のび「だめだ…立ったまま死んでいる」

警官はショットガンを持ちながら立ったまま死んでいた

のび「このショットガン弾はないけど使えそうだな」

ショットガンを手に入れバリケードの奥に進む

のび「硬いワイヤーで撒きつけられてるワイヤーカッターがないと無理みたいだな探さないと」

のび太は建物の中に入りカッターを探す

？「嫌！来ないで！」

のび「聖奈さん！」

ゾンビに追い詰められた聖奈がいた

のび「このっ！」

バンッバンッ

おうおう…

のび「聖奈さん大丈夫？」

聖奈「ええありがとうのび太君」

のび「聖奈さんこれってもしかして…」

聖奈「間違いなくあの時と同じようね」

のび太の町でも起こった人が人を襲う事件

聖奈「さっき大通りで激しい銃の音がしたけど今は聞こえないみたいね」

のび「やっぱり警察は…」

聖奈「また私達だけで何とかするのかなさそうね…この街のどこかにあるアンブレラの研究施設もね」

のび「そうですね、僕はまた行きます聖奈さんは？」

聖奈「私はここで少し休んでいるわ、すぐに追いつくと思うから心配しないで」

聖奈とわかれ、探索を続けるのび太

のび「この死体のなかに何かないかな？……あつたぞワイヤーカッターだ！でも刃こぼれしてるや…」

うわあああ

おおおおお

おううう

ああああ

周りの死体が起き上がりのび太に襲い掛かってきた

のび「うわあああ！助けてドラえもん！」

そのころ仲間達が集まっている家で

ドラ「大丈夫かなのび太君？」

ジャ「聖奈さんがいるから大丈夫だろ」

白峰「だが聖奈も結構無茶するような奴だぞ」

安雄「うゝゝん」

はるお「大丈夫か安雄？」

健治「寝かしてやれそいつは一応重傷者だからな」

太郎「今日の新聞だよ」

咲夜「太郎君ありがとう……」

静香「どうしたの？咲夜さん」

咲夜「皆！これを見て」

そうすると咲夜が見せた新聞の一面に…

出来杉「『謎の狂人事件人が人を喰らい喰らった人もまた喰らう』
ってまさか」

スネ夫「それにここの街つてのび太と聖奈さんが行った場所じゃあ
…」

出来杉「またアンブレラが絡んでいるようだね」

ジャ「助けに行かないと」

ドラ「待つてジャイアン今行っても状況がわからないままじゃ駄目
だよ」

ジャ「でも放つとけて事かよ！」

出来杉「ドラえものの言うとおりだよ今迂闊に行った所で警察官や
自衛隊が通さないしもつと状況を調べないとそれにのび太君と聖奈
さんだよきつと大丈夫だよ」

ジャ「うう、くそ」

スネ夫「ジャイアン…」

そのころのび太は…

のび「助けて〜！ドラえもん！」

ゾンビに囲まれていた……果たしてどうなる！？

次回へ

No.1 「悪夢再び」(後書き)

ドラえもののび太のバイオハザード

無理のないバイオ?とはちょっと異なります

No.2 「感染の街」

No.2 「感染の街」

のび「このっ！」

バンッバンッ

おおおお…

あああああ

のび「きりがない一旦逃げよう」

バンッバンッ

ダッダッダッ

バンッ

ダッダッダッダッ…

のび「ハア…いなくなったな、でもこのワイヤーカッター刃こぼれして使えないな…どこかに替え刃はないかな？」

少し歩き…

のび「このコンビニの中に無いかな？」

ピシャー、ギギッ

のび「このっ開け！」

ドンッドンッ

のび「よしっ」

コンビニ内に入るのび太

のび「あつたぞ！」

カチャッ

のび太はワイヤーカッターの刃を替える

のび「さっきの所に戻るか」

ああああ

のび「まずい！早くしないと！」

ダッダッダッ

くバリケード前く

ギギギギギ！バチン！

のび「切れた！よしっ行くか！」

進んだ所に警官が倒れていた

のび「！大丈夫ですか！？」

警官「ど…同僚の特殊部隊の奴が発狂して…見境なく…狙撃しているんだ…その通りを通るなら気をつけろ…いきなり撃ってくるぞ…」

のび「！？大丈夫ですか！？…駄目だ…息絶えたみたいだ」

スタスタスタ…

ドウン！…… カンッ！

のび「うわっ！危ない！」

ドウン！…… カンッ！

のび「…発砲音より先に弾が飛んできたってことは…遠いんだっけ？近いんだっけ？どっちだ？」

ドウン！…… カンッ！

のび「とにかく近くに行ってゾンビじゃないことを伝えなきゃ！廃棄物なんかで隠れながら近づく」

スタスタ…

ドウン！…… カンッ！

のび「おつと！」

スタスタ…

ドオウン！…… カンッ！

のび「よつと！」

スタスタ…

ドオウン！…… カンッ！

のび「そろそろ近ずいて……」

うわっあああああ！

のび「！？」

ぐちゃぐちゃぐちゃ… ああああああ

のび「…こつちに夢中で後ろに気が付かなかったのか…気を付けないと半狂乱になった人にも襲われるかもしれないな…」

かどに曲がり進むと

のび「ここは…警察署か…ここなら生存者もいるかもしれないし何か武器があるかもしれない、それに電話が無線通信で皆と連絡が取れるかもしれない…行ってみよう！」

入ろうとするが

のび「そうだ！倉庫にいる人達を呼びに行こう！」

ダッダッダッ

.....

？「くそっ警察署か！嫌だがここしかなさそうだな」

ダッダッダッ

果たして今の男は一体…

く倉庫く

のび「こ、これは一体」

警官「うっ、はあ…はあ」

のび「！大丈夫ですか！？一体どうしたんですか？」

警官「はあ…生存者の中に感染したものがいて、取り押さえてる間に奴らが来てこの様だ…坊主…すまないが…逃げろ…ここはもう危険だ…逃げろ、逃げろん……」

のび「……うっくそっ僕がもっと早く戻っていれば……！……さようなら皆さん！」

警察官の死体から弾を取り出し警察署に向かうのび太

「警察署」

のび「よしっ入るか」

次回へ

No.3 「謎の犬&危ない生存者」

No.3 「謎の犬」

のび「よしっ入るか」

聖奈「のび太君！」

のび「聖奈さん！今から警察署の中に入ってみようと思ったんです。一緒に…！？どうしたんですか！？血が…！？」

聖奈「犬が…変な犬が…！！」

のび「犬…？野生の犬が野生化した奴じゃ…」

聖奈「あれは野生の犬なんかじゃないわ！頭が二つもあって」

のび「落ち着いてください！まず何があったか…！？」

グゴアアアア

頭が二つの犬が柵を飛び越えてやって来た

のび「何だあの犬！」

聖奈「下がってのび太君！」

ダンッダンッ

ヒュッ

グオオオオ！

聖奈「嘘！？かわした！」

ガアアアア！

ガジュ！

聖奈「う…はっ…」

のび「聖奈さん！」

聖奈「逃げ…て…」

のび「せ、聖奈さん！！そんな…」

グオオオオ

のび「こっちに来る！…やるしかない！」

グオオオオ

ダンッダンッ

ヒュッ

ダンッダンッ

グオオオ

のび「くそっ全然当たらない」

グオオオ

ダンッダンッ

ギャウ！

のび「当った！」

グオオオ

のび「うわっ」

グオオオ

ダンッダンッ

グオオオ

ダンッダンッ

のび「どうだ！」

ダンッダンッダンッダンッ

グオオオオオ

のび「に…逃げたのか？…そうだ聖奈さん！」

のび「そんな…聖奈さん…こんなところで…うつ…」

のび太は警察署に入っていく

～警察署～

のび「これは命令書か…」

～命令書～

署員の一人が弾薬庫から大量の武器弾薬を奪って逃走した。手空きのものは探索、追跡を行うように

尚、現在は非常下につき逃走した署員よりも武器弾薬の確保を優先とする、報告だがこの街の暴力団の生き残りがいるかもしれない気をつるように

のび「やっぱりこんな状況だから…みんなパニックになってるね…それとこの暴力団って一体…」

ガチャッ

？「それは俺の事の様だな」

のび「なっ！？」

？「動くな、でないと頭が吹っ飛ぶぞ」

のび「あなたは一体」

？「俺はこの街の暴力団の幹部…いや元幹部か…」

のび「まずはその銃をおろしてくれませんか？」

ガチャ

？「小僧、お前よくここまで来たな…」

のび「まず名前は…」

？「…良いだろう俺は茂田 辰さつきも行ったとおり暴力団元幹部」

のび「僕は野比 のび太ですそういえばその暴力団の仲間は…」

辰「……みんな化け物共のお仲間さボスも部下も…」

のび「あの…どうやって此処まで」

辰「俺の愛用の銃があったおかげだな、お前こそどうやって来やがったんだ？」

のび「同じですね、あのもし良かったら一緒に脱出の手段を探しませんか？」

辰「あ？何でだ？」

のび「その方が効率もいいですし、何かつかめるかも知れません」

辰「悪いが餓鬼の子守はしたくねえんでなてめえ一人で勝手に行っ

たな」

のび「僕は餓鬼じゃありません！それに生きたくはありませんか？」

辰「…てめえいい度胸してるな…おい…：…良いだろう一緒に行ってやるそれに脱出するしか方法がないしな…：だがお前も奴らの仲間入りしたときには遠慮なく眉間に弾ぶち込んでやるからな…：そのつもりでいろ」

のび「わかりました後武器は何がありますか？」

辰「これだ」

辰が見せたのは仕込みナイフに拳銃二丁のベレッタ、マグナム

のび「それじゃあまずここを探索しましょう二手に分かれて」

辰「ああ」

暴力団の幹部が仲間に加わり警察署の探索を始めるのび太

次回へ

No.3 「謎の犬&危ない生存者」(後書き)

茂田 辰はこの小説の『オリジナル』キャラクターです

多分生き続けると思います

No.4 「警察署の探索」

No.4 「警察署の探索」

のび「それじゃあまず二手に分かれて探索しましょう」

辰「良いだろうその方が効率いい」

のび「それじゃあ僕はこっちに行きますので辰さんは……あっ！」

辰「お前なんかに言われる筋合いは無い俺は好きなようにする」

のび「はあ……じゃあ僕はこっちか……」

数分経ち

のび「警察官の死体だ何か手に持っている」

（真敏巡査の報告書）

12月10日日未明、市庁舎にて盗難が発生被害を受けたのは下町とこの地区を結ぶ防災用の門の鍵が2つ 現在街内は大混乱状態にありすでに多数の警官が残職している。そのため本件の調査は保留とする本日午前10時頃、署内に逃げ込んだ22歳（無職）が盗難にあつた防災用扉の鍵の一つを所持しているのが判明した。男性は数十分後に死亡確認。後に蘇生、凶暴化により射殺本件は混乱状態のため調査を保留とするが証拠品である鍵はしばらく署内で保留することになった

真敏巡查

のび「鍵ってまだあるのかな？」

少し探索し

のび「頑丈な扉だ武器庫と書いてある…鍵を探さないと駄目だな…どこにあるのかな？」

～2階～

のび「警察官の死体だ何か手に持ってる…」

～佐々木巡查の手帳～

どうにかなりそうだ。こんな事になっちまうなんて昼の襲撃にまた同僚が死んだ。大好きな交通課の堀井だ俺が怪物犬の侵入に焦って逃げ遅れそうになった時、奴は俺を助けようとして応戦したんだ。そんな奴を俺は置いて逃げた。奴は俺の名を呼ぶ、そして背後から絶叫が聞こえる。俺は怖かったんだ、恐ろしかったんだ。

夕方、侵入してきた怪物共を大量に片づけてた俺は景気付けに押収品のLSDを打ちながらアホ面共に猟銃店で強奪したショットガンをぶっ放す。これなら一気に数匹のミンチができる。俺は歓声を上げて奴らを撃ちまくった。すると石田巡查長がつかみかかった。もの凄い剣幕で殴り飛ばされた。

よく見ると怪物どもと一緒に同僚が数人巻き添えを喰って転がっている。良いじゃねえかどうせ死ぬ前のパーティーさ俺が楽にしてやった仲間は二人、渡辺と佐藤巡查だ

今まで怪物に殺られた奴らを含めると三十二、三人は死んでいる。ずいぶんとまあ頭数が減ったもんだ三時間後には仮眠室でくだらな

いことを話し合う。まったく無駄だ。俺はこの薬が無くなったら死ぬつもりだ。その時が待ち遠しいね。

のび「この日記を見る限りこの人も半狂乱になったようだな……」

のび「扉がある、鍵が掛かっているでも鍵穴なんてないし……」

ドォンドォン バキィ

ガチャ

のび「この死体の胸ポケットに何かある……」

ID CARDを手に入れた

のび「確か入り口付近にパソコンが多い場所があったな……」

移動し

のび「これだな……」

ピッ ID CARDを挿入してください シュッ ……………

…認識完了。2階拘置室がシステム誤作動のため現在ロック中です。

のび「何のことだろう？……一応解除しておこうか」

解除完了しました。

のび「その拘置室に行くか……」

のび「ここは…さっきは入れなかった部屋だ拘置室だったのか…」

ガチャ

のび「うつぶ…酷い血の臭いだ…」

キラッ

のび「今何か光ったかな？……血溜まりの中に何か落ちているみたいだ…鍵？」

赤い鍵を手に入れた

のび「何の鍵だ？もしかして武器庫のかな？行ってみるか………
ああもう夜か…」

〈通路〉

パリーンッ！

のび「何だ！？」

ガウッ

のび「お前は！よくも聖奈さんを！」

ガウッ

のび「喰らえっ！」

ダンッ

ヒュッ

のび「！？そうだこいつは弾を避けるんだった」

ダンッ

ガウッ

ダンッダンッ

グオオオ

ダンッダンッダンッ

ギャウッ

ダッダッダッ

のび「…逃げたかくそっ」

キラッ

のび「ん？何かある…」

武器庫の鍵を手に入れた

のび「これが武器庫の鍵かじゃあこの赤い鍵は…ん？」

誰かの腕があつた

のび「いや腕はいいよ」

ポイツ

のび「武器庫に行こう何か良いものがあるかも」

（武器庫前）

のび「あれ？刺せたけど抜けないな…しょうがないこのまま刺したままにしておこう」

ロッカーにショットガン、ハンドガンの弾2個とグレネードランチャーがあつた

のび「そろそろここから出るか」

ガチャ

辰「おお小僧生きてたか死んだと思ったぞ」

のび「辰さんちょうどこの警察署を出ようと思っているんです」

辰「あ？何でだここのほうが安全に決まってるだろ」

のび「いえこの中にとんでもない化け物がいるんですだから早く出ないと」

辰「化け物…か…確かに出くわしたくは無いな…わかった」

のび「じゃあ行きましょう」

「警察署駐車場」

のび「！？（聖奈さんがいない！？いったいどこへ……まさか……ゾンビ化したんじゃない）」

辰「どうした小僧？早くしないと置いてくぞ」

のび「（聖奈さん……）」

次回へ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1898w/>

のび太のバイオハザード「オリジナル」

2011年12月3日17時57分発行